

---

# 盜賊ブレイブ@海賊と体力測定

ブレイブ&秋留

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@海賊と体力測定

### 【NZコード】

NZ0333D

### 【作者名】

ブレイブ＆秋留

### 【あらすじ】

【ブレイブシリーズ3】半獣人化したカリューを治すため、アステカ大陸にあるガイア教会本部を目指した一行だつたが、航路に海賊が出るために船が出ず、港町ヤードで足止めを食らっていた。身体の鈍ってきたカリューは、開催されたレベル測定大会に意気揚々と参加。その姿が、船の護衛を探していた商人の目に留まる。「レッド・ツイスターの皆さん、私達の船の護衛をしてください！」果たして、ブレイブ達は無事にアステカ大陸に渡ることが出来るのか？！

## プロローグ

「もういい加減、海の幸も食べ飽きたな」

俺は一緒に食事を取つてゐる仲間達の方を見る。

正面の真っ青な毛並みをした獣人が海老フライをフォークで弄びつつ頷いた。その獣人の顔は不機嫌そのものだ。

「老人の胃には優しいんだがのあ

「でも最近少し老けたんじやない？」

俺の左に座つてゐる少しだんディな感じの老騎士の台詞に、俺の右側の女性がおどけて答えた。

俺は窓の外を眺める。潮の香りが漂つて來た。

ここはチエンバー大陸の南方に位置する港町ヤード。この町に到着してから1ヶ月程経過しただろうか。今では町の裏路地にある様な見つけ難い店までも知り尽くしてしまつた。

「この辺一帯の依頼はこなしちゃつたからなあ。暇だよなあ」

懐の銭袋の感触を確かめる。色々な依頼料や悪人を治安維持協会に引き渡した謝礼金で俺の懐はポカポカだ。

なかでもとある魔族の館から押収したオリハルコンの像と短剣は合わせて六千万カリムにもなつた。残念だつたのはオリハルコンの像が銀と混ぜ合わせた安物だつたという事だ。あれが純オリハルコンなら億を超えると買取専門店の店主も興奮して言つていた。

暇な俺達は細かい依頼も数多くこなした。その代わりにこの港町ヤードは大した悪人もいない、冒険者にとつては退屈な町と化してしまつた。

「もう雑魚相手に戦うのも飽きた！ 俺の正義の腕が鈍つちまつよ 目の前の悪人面をしてゐる獣人が不自然にも正義を語る。

俺達パートナーのリーダーである獣人のカリュー。色々な諸事情で今は獣人をしているが元は生糸の人間だ。

性格は熱血一筋で樂をするのは大嫌い。正義のためなら命も掛け  
るという、俺に言わしてみれば、ただの大馬鹿者以外の何者でもな  
い。

カリューは獸人になつた事を後ろめたく思つてゐるのか、今まで  
青一色に統一されていた装備を一新して、目立たない茶色を中心  
にした装備にしている。まるでどこかの盗賊団を指揮してゐる獸人のよ  
うだ。

俺の考え方の内容に気付いたかのようにカリューは俺を睨み始め  
た。

俺は眼を反らして渋いお茶をズズズと飲んでゐる老騎士を見る。

「ブレイブ殿もお茶飲みますかな？」

「いや、遠慮しとくよ」

聖騎士のジェットは持ち上げた急須を寂しそうにテーブルに戻し  
た。

どんな時でもお茶を手放さない老騎士のジェット。若いメンバー  
ばかりの俺達パーティーの保護者の存在だ。

ジェットもこの町に滞在してゐる間に装備を新しい物に変えてい  
た。真新しい淡い水色の鎧は店内の明かりを反射して綺麗に輝いて  
いる。

聖騎士であるジェットは本来なら聖なる力を持つ鎧などを装備す  
る事も可能だ。

しかし装備出来ない理由がある。

ジェットは死人なのだ。聖なる力を発するような装備を纏つた瞬  
間にジェットは苦痛により転げまわる事になる。俺達とジェットが  
出会つた当初は死人の身体に慣れていないジェットにも色々な事が  
あつた。今では死人の身体にもすっかり慣れたようだが。

「ここのお茶、結構美味しいよ」

我がパーティの紅一点、幻想士の秋留が美味しそうに食後のお  
茶を飲み干した。

「そうか？ 秋留も結構お茶好きだよな」

俺は満面の笑みで答える。いつ見ても秋留は太陽の様に眩しく美しい。

俺達パーティーの頭脳であり、各種魔法を唱える事も出来る才色兼備の秋留。ジェットを死人として復活させたのもこの秋留だ。

秋留はこの町で手に入れた、新緑の鎧という魔力のこもった緑色の鎧を身に着けている。スカートは左右で長さの違うデザインとなつていて秋留の右足が怪しく俺を誘う。

俺は同じテーブルについているパーティーを再び見回した。このパーティーを組んでから三年位たつただろうか。今ではメンバーそれぞれの癖まで分かるようになった。

「カリュー、暇なのも後少しの辛抱だよ」

「そうだったな！ 久しぶりに俺の腕が試される時が来たんだった」秋留の励ましにカリューが立ち上がってガツツポーズを取る。恥ずかしいから止めてくれ。俺の耳にはザワザワと噂している声が鮮明に聞こえてくる。

「俺が本物の勇者である事を全人類に知らしめてやるぜ」

自称勇者のカリューが尚もガツツポーズを取りながら大声で叫んだ。熱血街道まっしぐらといった感じだ。

俺達のパーティーは、自称勇者である獣人のカリュー、死人である聖騎士ジェット、女神兼幻想士の秋留、そして最期の切り札、盗賊である俺様ブレイブの四人パーティーだ。魔族討伐組合に属している冒険者のほとんどが四人パーティーと言つてもいいかもそれない。

ちなみに魔族討伐組合とは、モンスター や魔族に襲われている町や村があると言つた情報から、三丁目のオッサンが猫を探していると言つた初心者向けの依頼まで取り揃えている民間企業である。

その魔族討伐組合の子会社『レベル認定友の会』が開催するレベル測定大会が一週間後、この港町ヤードで開催されるのだ。

「待つていろ！ レベル測定大会！」

カリューが右手に持つたフォークから海老フライが空しく落ちた。

俺達は昼食を食べ終えて宿屋に戻る大通りを歩き始めた。一週間後に控えているレベル測定大会のためか大通りを歩く冒険者の数も多い。

「食後の運動しないか？」

カリューが拳を鳴らして言つ。その獣人の顔で言つとこれから悪事を働くように聞こえるぞ。

カリューの言つ食後の運動とは、この港町周辺を見回つて手頃なモンスターを倒すという事だ。レベル測定大会の知らせを聞いてからは、カリューは毎日のように運動に行きたがる。

「二二二、三日は出掛けないですな。たまには良いんじゃないかのよ」

ジエットは快諾しているが、俺は金にならない事はしない主義だ。確かにレアなモンスターを倒せば珍しい牙や毛皮を高く買い取つて貰える。しかし今、この港町ヤードの周りには俺達と同じような考えで狩りをしている冒険者パーティが沢山いる。

しかもヤード周辺に現れるモンスターは雑魚ばかりだ。

「ガオオオオオ！」

カリューが血に飢えた獣の様に雄叫びをあげた。周りを歩く一般人や他の冒険者が一斉に遠ざかる。

「カリューのストレス発散のためにも町の外に出たほうが良さそうだね」

秋留がボソリと呟いた。

「お～、やつてるやつてる」

港町ヤードのゲートを抜けると早速近くでモンスターと戦つているパーティがいた。まだまだ初心者のようだ。

冒険者同士のルールとしては、基本的に戦闘中のモンスターの横取りはしてはいけない。「助けてくれ」と叫んでいる場合は別だが。

「俺達ももう少し進んでみようぜ」

カリューが大きな舌で口の周りを舐めながら言つた。

ヤードが小さく見える程に歩いた頃、第一モンスターを発見した。人間と同じ位の大きさでムカデの様なモンスター、モゾムだ。虫の嫌いな秋留は少し離れた木の陰からこちらを覗いている。まあ、モゾムは低レベルなモンスターだから、全員で狩ることもない。木の陰にいる秋留から目線を前に戻すと、モゾムは既に真っ二つになっていた。その一つになつた身体がジワジワと燃え始めている。

「全然物足りないな」

右手に持つた業火の剣を鞘に収めてからカリューが言う。

業火の剣は港町ヤードの武器屋で見つけた魔力を持つ剣だ。その刀身からは名前の通り業火が舞う、という武器屋の親父の話だったが、実際は剣を突き刺すと微弱な火が立つ程度の代物だった。

野宿の時は肉を焼くのに便利、と馬鹿にしたらカリューは鬼の様に怒つていたつけ。

「お、次が来たぞ」

またしても低レベルなモンスターかつ良く見かけるモンスター・N-01のゴブリンが現れた。三匹で仲良く走つて来る。それぞれ棍棒や短剣等を装備している。

カリューが地面を蹴りモンスターの群れへ飛び込む。一瞬で三匹のモンスターの身体が崩れた。

つて、俺達は何もせずに突つ立つているだけか。ジェットは近くの木の下で秋留と一緒にお茶を飲んでいた。俺もその隣に腰を下ろした。

「カリューって前より凶暴になつたよね」

秋留が呟く。

確かに人間だった時よりもモンスターの倒し方が残酷になり、言葉が汚くなつた。

しかし戦い方が荒々しくなつたと同時に、強くなつたのも事実だ。獣人の特徴である素早さが追加されたためだろう。

このままカリューが獣人のままだとどうなつてしまふのだろうか。

カリューの場合は元から獣人だつた訳ではない。

色々な偶然が重なつて獣人となつてしまつたのだ。その身体には危険な因子も含まれているに違いない。

「早くガイア教会本部に行つてカリューを見てもらいたいんだけどね」

俺達はカリューの獣人化の謎を解いてもらつたため、アステカ大陸にあるガイア教会本部を目指しているのだ。

「船がないとはのあ～」

そう、ジェットが言う通り、アステカ大陸行きの船が無いのだ。元々アステカ大陸行きの船は少ないし、今はこのチエンバー大陸とアステカ大陸を結ぶ航路に腕の良い海賊が出現するという事で、船乗り達も尻込みしている。

そんな諸事情のせいで、港町にいる船乗り達はアステカ大陸に行く事に関しては首を縊には振つてくれない。

「おらおら～！ サッサとかかってきやがれ～！」

少し離れた所ではカリューが元気にモンスターの相手をしている。周りにはモンスターの死体が増えつづつあった。どの死体も半分燃えている。

「業火の剣は切れ味も良くてカリューは気に入つてゐるみたいだけど、あれじやあ毛皮も牙も賣れないんだよなあ～」

俺は半泣きになりながら愚痴つた……。

日が西に広がる大海原に沈み始める頃、俺達は港町ヤードへのゲートに戻つてきた。

「やあ、お帰り！」

すっかり顔見知りとなつた門番が声を掛けてくる。こいつの名前は覚える気もないで知らない。この門番は大きな町を守つてゐるとは思えない程、氣の抜けた奴だ。

生きていれば百十六歳のジェットや、身分証とは見た目の違う獣人のカリューをすんなり通すのはおかしいのだが、この門番は適當

な会話で俺達を通してしまつている。

「今日はどうでした？」

「雑魚ばかりで腕が鈍っちゃうよ」

十分過ぎる程無駄にモンスターを倒したカリューが答える。カリュー以外の俺達三人はカリューの攻撃から逃れてきたモンスターを二、三匹倒した程度だ。

俺達は無能な門番を通り過ぎ、大通りを歩いて最近ずっと世話になつてゐる宿を目指して歩き始めた。今の時間なら宿の夕食が食べれそうだ。

「腹が減ったな」

獣人になつて食欲も増大したカリューが言う。俺も軽く運動をしたせいで腹が減った。

「ワシは銀星の様子を見てくるですじや。終わつたらすぐに宿に行きますので、先に食事を取つていて構わんですぞ」

ジエットはそう言うと大通りの横道を入つていった。その先には冒険者達が自分の馬を預けている共用の馬屋がある。

銀星とは、ジエットと共に秋留に死馬として復活させもらった生前からのジエットの愛馬だ。最近は長距離の移動が無いため、銀星の出る幕が無い。

大通りの左側に俺達の泊まつてゐる、魚のお宿の看板が見えてきた。

俺達は数々の依頼をこなし懐が暖かいために、この宿に一人ずつ部屋を取つてゐる。普段は秋留一人の部屋と残りの野郎共の部屋で二部屋取つてゐるのだが、俺的には秋留と同じ部屋で寝たい……。

「プレイブ、何ニヤけてんの？ 宿に着いたよ」

「おお、帰つたか！」

門番同様に顔見知りとなつた宿屋の主人が大声で話しかけてくる。基本的に人見知りをする俺は他人とはあまり付き合いたくないのだが、一ヶ月も同じ町にいると顔見知りも自然と増えてきてしまう。

「今日は珍しい魚が手に入つたんだ」

「じゃあ、それ頂こうかな」

秋留が可愛く答える。俺は秋留の見た目だけではなく、楽器のハープの様な美しい声も大好きだ。

「さすが秋留ちゃん！」

宿屋の親父が馴れ馴れしく言つ。俺は思わず腰にぶら下げているネカーとネマーを構えようとした。

それに気づいたのか秋留が白い眼で俺を睨む。

俺は咳払いをすると両手を大人しく下に下ろした。

ちなみにネカーとネマーは鉛の弾の代わりに硬貨を発射する事が出来る、世にも珍しい銃だ。俺は冒険者になった時からこの一丁の拳銃を使っているため、自慢出来る程にその命中率はズバ抜けている。

俺の職業は盜賊じゃなくて銃士としても十分にやつていけるだろう。

席に着くとすぐに宿の親父が料理を運んできた。ちなみに親父の名前はフィッシュだ。港町に生まれたかららしいが両親も思い切った名前をつけたもんだ。

「今日はジェットの爺さんは居ないのかい？」

「間に合いましたかな？」

ジェットが宿屋の親父の問い合わせて席に着く。

早速、珍しい魚らしい刺身の活け造りが宿の店員によつて運ばれてきた。

「ゴールデンフィッシュっていつ分かりやすい名前の魚なんだがね」「フィッシュが腕組みしながら説明する。

俺は早速その魚の値段を聞いた。一匹一万カリムはするという事だった。俺は今後の航海に備えて高価な魚の名前を心に深く刻み込んだ。

それから俺達は美味しい魚に舌鼓を打ち、それぞれの部屋に戻つていった。早速俺は汗を流すために部屋に付いている風呂に入る。やはり風呂は気持ち良いし疲れが取れるな。

「後一週間か」

風呂の低い天井を見上げて独り言を言つ。

以前レベルを測定したのはゴーリドウイッシュュというチエンバー大陸の隣にある大陸にいる時だつた。俺達パーティが出会つた大陸であり、あれから三年が経過している。一体、どれ位レベルが上がつているだろうか。まさか下がつてはいないとと思うが。

レベル測定大会は、職業毎に異なる検査項目によりレベルを測定する大会だ。戦士なら体力や武術を中心に、魔法使いなら魔力測定が中心だ。ちなみに盗賊は洞察力なんかを調べたり、実際に罠のある宝箱を開けるような項目もある。

だからあまり冒険をしていなかつたり急げていたりすると、レベルが下がる事もある。

後、残念ながらゾンビに大会参加資格は無い。一般的魔族討伐組合に名前を登録している冒険者が対象だ。今回ジェットは一人で留守番となる。

俺達の心配事は種族が変わつてしまつたカリューだ。レベル測定大会には参加出来るのだろうか？

「誠意があれば参加出来る！」と豪語していたが、参加出来ないとなつた時の暴れ様が怖い。

俺は長めの風呂から上がると、部屋に置いてある炭酸飲料を飲み干した。二十歳を過ぎたのだからビールでもキューっと飲めば様になるのだが生憎酒にはあまり強くない。一方、カリューとジェットは酒が大好きだ。秋留はあまり酒を飲まないが、強いのだろうか？

「とりあえず、寝るか」

秋留の事を色々と考えつつ部屋の明かりを消して布団に潜つた。

## 第一章 レベル測定

あつという間に一週間が経過した。

あれからもう一回カリューの運動に付き合わされたが、それ以外は何かノンビリとした時を過ごせた。

今日はレベル測定大会初日、開会式がヤードの海際に建っている多目的ホールで行われる。

ここで参加者登録も行われるため、かつたるい開会式にも出なくてはいけない。

「早く準備しろ～！」

気の早いカリューが部屋の外で怒鳴っている。開会式は午後の二時から。今はまだ十時……。まだ起きたばかりなんんですけど。遠足前のガキか、お前は。

「カリュー、早いね～」

「お、秋留。珍しく早いな」

「今日は眼が早く覚めちゃったんだよ～。もつと寝ていたかつたんだけど……」

「やっぱり秋留も興奮して眠れなかつたのかあ！ 僕も興奮して眠れなかつたんだ！」

ドアの外で秋留と会話しているカリューに、激しい嫉妬心を抱きながら急いで出かける準備をした。今日は開会式だけだが、沢山の冒険者が集まるので馬鹿にされない様な装備をしていかないといけない。

俺は内側に色々と仕込んでいる袖のないコートを羽織った。このコートは飛竜の羽で出来ている特別性で、羽自体に浮力があるため内側に装備した物が若干軽くなる。

「待たせたな」

若干息を切らしながら勢い良くドアを開けた。派手な音を立ててドアがカリューの顔面に当たった。

「おはよ、ブレイブ」

「おはよう、秋留！ 今日もとってもきれ……」

「とっても綺麗だね」と危うく本心を声に出しそうになつたのを、

口を押さえて防ぐ。

「うん？」

秋留が可愛く頭を傾げる。

「とってもキレイが良いね！」

なんとか訳の分からぬ事を言つて誤魔化した。秋留は苦笑いをして「まだ寝ぼけているんだね」という眼で俺を見た。そんな眼で俺を見ないでくれ……。

「皆さん、揃いましたな」

ジヨットが自分の部屋から顔を出した。しっかりと装備をしている。

「あれ？ 今日は留守番しているんじゃなかつたの？」

「昨日フィッシュさんに聞いたんじゃが、今回のレベル測定大会は冒険者ではない一般人も見物する事が出来るらしいですぞ」「えへへへ！」

俺は思わず大声を上げてしまった。一般人に見られる……。俺は基本的に人に注目されるのが大嫌いだ。

レベル認定友の会め！ 金儲けのために冒険者を見世物にしやがつて。

「一般人共に俺の強さを見せる時が来たな！」

カリューは一段と気合が入ったようだ。秋留もどこか嬉しそうだ。人に注目されるのが嫌いではないのだろうか。

「お！ 勇者パーティー御一行様の出発かな？」

宿屋の親父が宿屋のドアの前で待ち構えていた。朝から元気が良いもんだ。

「親父も見に来るのか？ レベル測定大会」

「俺は店があるからな。大人しく留守番しているよ」

自称勇者カリューの問いに親父が心底残念そうに答える。てめえ

は来るんじゃねえ！ 少しでも一般人の見物人を減らしておかないと、いつもの半分も力が出せそうにない。

眩しそうな太陽が俺達を照らす。開会式にピッタリの雲一つ無い快晴だ。

「太陽も俺の活躍を期待しているようだな」

若干暴走気味のカリューが言つ。

獣人化したせいで性格も変わつてきているようだ。前は「冗談も通じないような生真面目人間だったのに。」

宿屋の前の大通りはレベル測定大会開会式に向かう冒険者で溢れていた。そいつらの眼が俺達に向けられているのが分かる。

「あ、秋留だぜ。相変わらず可愛いよな」

「レッド・ツイスターだな。カリューの姿が見えないぞ」

「代わりに獣人を仲間に入れたのかしら」

通りを行く冒険者達のヒソヒソ声が隣で話しているかのように聞こえてくる。俺の盗賊としての能力のお陰で少し離れた会話も手に取るように分かってしまう。とりあえず秋留の事を喋つている奴の脳天に硬貨をブチ込んでやろうか。

「俺達も腹ごしらえをしてから開会式に向かおうぜ」

カリューが舌舐めずりをして言う。その邪悪な光景を見て何人かの冒険者が怖気づいた。奴らはまだまだヒヨツコに違いない。

「どの店も込んでいる様ですね」

「今回のレベル測定大会は一般人の見物人も多そうだからね」

レベル測定大会の経済効果は大きそうだ。その利益の何割かを俺に分けたりとかはないのだろうか？

「あの角の店は空いてそうだぞ」

俺は大通りから少し入った所にあるパスタ屋を指差して言った。神経を集中させて観察したところ、まだまだ空き席はありそうだ。

「んじゃ行くか」

「いらっしゃいまつせ～」

店の扉を開けた途端にパートらしきオバちゃんが笑顔で言つ。

「あんた達もレベル測定大会に参加するのかい？」

図々しいオバちゃんが気さくに話しかけてくる。駄目だ、人見知りの激しい俺には生きていけそうにない。

「うちの店は冒険者を応援しているから、冒険者にはいつもの半額で食事して貰つていいよ」

店を出ようとしていた俺の脚がオバちゃんの台詞で止まる。しようがないな。この店で我慢しよう。

俺達は厨房の近くの席に案内された。ニンニクの香りが胃を刺激する。

俺達はそれぞれ違うメニューを注文して運ばれてくるのを待つた。  
「緊張しているのか？ ブレイブ？」

鼻をヒクヒクさせながらカリューが言つ。その滑稽な見た目に思わず笑いそうになつた。

「いや、お前のお陰で少し緊張がほぐれたよ」

カリューの頭にクエスチョンマークが浮かんでいるのが見える。  
「お待ちどうさま！」

オバちゃんが器用に両手に四皿分のスペゲティを持つてやつてきた。俺の注文した海の幸のカルボナーラも美味そしが、秋留の頬んだカニとタラコのソースパスタも美味そうだ。

「少しあげよつか？」

さぞかし羨ましそうな眼で見ていたのだろうか？ 秋留が自分のパスタを小皿に移してくれた。俺も御礼に小皿に自分のパスタを盛る。

「美味しいな～」

カルボナーラも美味しいが、秋留の頬んだソースパスタも美味しい。

「カルボナーラも美味しいよ」

秋留が笑顔で答える。その笑顔が一番綺麗で美味しいそうだ。

「お前らカツフルみたいだな」

カリューが突然爆弾発言をする。

俺は口に含んでいたパスタをカリューの顔にぶちまけた。普段慌てない秋留も顔を真っ赤にして咳をしている。

「ワシと婆さんが若い頃の事を思い出しますなあ」「ジョットが遠い眼をしている。ジョットの奥さんはジョットが生きていた時に他界している。

「ブレイブー！ テメエはいつもワザとか、それは！ 今朝もドアを俺の高い鼻にブチ当てやがって！」

こうして五月蠅いけど少し幸せな気持ちも出来た食事は幕を下ろした。

#### 『港町ヤード開催 レベル測定大会 開会式』

俺達の目の前の巨大なアーチに大きく文字が書かれている。多目的ホールには冒険者が続々と入つていているが、一般人は開会式には参加出来ないようだ。

「ここに座ろうぜ」

三席続いている場所にカリューが進む。  
と目の前で俺達が座ろうとした席に、真っ白なスーツを身に纏つた男が先に腰を掛けた。

俺達が後ろで立ち止まつたのに気づいたのか、その男が振り返る。「ああ、すみません。席を取つてしましましたね。私は移動致しますので……」

俺の服装とは正反対の色をした謎の男はそう言って席を立つた。人に全く不安を与えないカリスマ的な声。しかし誠実そうな見た目とは裏腹に俺はコイツに危険な感じを持った。

赤い色の入つたサングラスの向こうではどんな危険な眼をしているのか分かつたものではない。

「……」

俺の服装と顔を見て男が暫く立ち止まつた。

「中々良いセンスをしていますね

感情がこもつていてる様でこもつていかない声で言つ。俺にはそれが分かつた。

「おお！ 美の女神がこんな所に！」

次に男は秋留の目の前で片足をついて言った。こいつ俺が言ったくても言えない事をサラリと言いやがつて。

しかし秋留は男の台詞に周りをキヨロキヨロして「どう？」ととぼけている。

男は諦めたのか俺達から少し離れた別の席に腰を下ろした。

「じゃあ座るか」

カリューが謎の男の存在など無かつたかのように、そのまま席に着いた。

勿論俺は秋留の隣に腰を下ろす。

「さつきのジジイは何だつたんだろうな」

見た目は三十歳位だった謎の男の事について秋留に聞く。

「美の女神なんてどこにいるんだろうね」

真面目に言つているのか分からない調子で秋留が答えた。

『一同、静粛に！』

ホールの至る所に設置されている拡声器から、舞台上に立っている初老の男の声が響き渡った。

『あー、これよりレベル測定大会、開会式を始める！』

これから退屈な時間が始まりそうだ。俺は早速両腕を組んで眠る体勢に入った。俺は盗賊としての特技の他に、時と場所を選ばずにすぐに眠りにつけるという特技も持つて居る。

「……ぐ~」  
「……ぐ~」

『であるからして……。あー、冒険者の皆様にはお詫びと言つては何だが、各職業で取り分け目立つ成績を残した者に、えー、レベル認定友の会から賞金と特別な商品をプレゼントしたいと思つ！』

俺の耳にステージで話している偉そうなオッサンの重要な台詞だけ耳に入った。

俺は鋭く眼を開ける。ステージ上には包みに入った数々の商品と『百万カリム』と書かれた大きな作り物の小切手が飾られている。「さすがブレイブ！ 美味しいところではちゃんと起きるんだな」カリューがすかさずツッコんだ。俺の隣で秋留はまだ寝ているが、元盗賊でもある秋留は今のオッサンの台詞をしっかりと聞いている事だろう。

宿屋へと帰る道の途中で、外で待っていたジエットと会流した。

「俺は俄然やる気が出たね！」

俺はジエットに親指を立てる。

「現金な奴だよ、お前は」

「まあ見世物にされるんだから、それくらい当然でしょ」

カリューの台詞に秋留が答える。

明日はレベル測定大会本番だ。今回のレベル測定大会は前半と後半の一日に分かれている。久しぶりに有意義な運動が出来そうだ。それにしても……。

「何かお祭りが開催されるようですね」

ジエットの言う通り、港町ヤードはお祭りムード満載だ。大通りの左右には色とりどりの簡易テントが張られ何かを焼ける様な出口が設置されている。

「屋台出るのかな？ 憐い楽しみ！」

秋留はピヨンピヨンと跳ねて嬉しそうだ。

カリューも楽しそうに辺りを見渡す。

「いやはや、祭りというのは何歳になつても良いもんですね」「こたさか歳の取りすぎたジエットが言った。

翌日。

ここ何日か晴れが続いていたが、今日は空に雲が多く見えた。港

町を吹き抜けの風は少し湿っている。

しかし空模様とは対照的に大通りには沢山の屋台が軒を連ねていた。至る所から良い匂いがしていく。

「プレイブは何か食べないの？」

秋留はどこで調達してきたのか、たこ焼きを頬張りながら言つた。

「中々美味いぜ！」

カリューまで右手にイカ焼き、左手にフランクフルトを持つている。

「沢山食べないと大会で力を出せないぞ」

カリューの台詞に俺は銭袋から硬貨を取り出し、右前方に見えていたお好み焼き屋に向かった。

「すみませんが、お好み焼きを一つ下さい」

俺が言う前に隣の男が出店の主人に言つた。全身白い服で身を固めた昨日の胡散臭い男だ！

「おや、昨日の……また先に取つてしましましたか？」

「いや、気にするな」

突然話しかけられる事に慣れていない俺は、不機嫌つぶりを見せないように答える。

「えへっと、名前を伺つていませんでしたね。職業は何ですか？」

仕方なく答えようとした時、続けて男が喋る。

「ああ、すみません。私から自己紹介するのが礼儀ですね」

そこで男は赤いサングラスを直した。

「私の名前はノーオーイ。職業は海賊です」

海賊。

盗賊とほぼ同じ能力を持つていいのだが、海賊の職業は船操る能力に長けている。

アステカ大陸への航路で悪さをしている海賊と名前は同じだが、正式に冒険者として活動しているかで異なってくる。それは盗賊でも同じ事が言え、海賊や盗賊は冒険者として活動していても余り良い眼で見られる事はない。

「ブレイブ、盗賊だ」

俺はそれだけ言つと、店の親父に金を払つてお好み焼きを受け取つた。

「あの方とはお知り合いなのですかな？」

戻ってきた俺にジェットが聞いてきた。

「昨日、開会式で会つたんだ。ジェットは知つてるのか？」「ノニオーラはジェットが最近見た冒険者クラブという雑誌で紹介されていたらしい。

海賊ノニオーラ、年齢は四十一歳という事だ。実際はもう少し若く見えた。今まで職業に就いていなかつたという事だが、アステカ大陸で実施されたレベル測定大会で初めてエントリーし、レベル四十六と認定されたらしい。俺の前回の認定レベルは三十四だったから、レベルは俺より高い事になる。

「頑張つてね、ブレイブ。嘘つき海賊になんか負けるな！」

昨日、美の女神を見つけられなかつたらしい秋留が俺を励ました。秋留の励ましは全てに勝る。

「観客席から見ていて、皆わん、頑張つてくだされ！」

残念ながらジェットの励ましは効果が無かつた。

レベル測定大会は、昨日のホールではなく町の隣に急遽立てられた特設ステージで行われる。

特設ステージに向かう途中の屋台をほとんど制覇した俺達は気力十分だ。

「グルルルル」

興奮したカリューが喉を不気味に鳴らす。

「じゃあ、また後でね」

残念ながら、職業毎に集合場所が違うために秋留とは離れ離れにならなければいけなかつた。俺は秋留に手を振りながら集合場所に進んだ。

『盗賊』『海賊』と書かれたプラカードと、そこから少し離れた

所にノニオーライがいるのが見える。

「レッド・ツイスターのプレイブだ」

「わたし、ちょっとファンなんだよねえ」

周りでザワザワと俺の噂話が聞こえる。悪くは無い。

「あ、ノニオーライだぜ」

「彼、紳士だよね。私はノニオーライの方が断然いいわ」

前言撤回。世の盗賊・海賊に俺の力を見せつけてやる。賞金と賞品は俺の物だ。

『えー、まずは職業毎に体力測定を始めて下さい』

拡声器から昨日のオッサンの声が聞こえてくる。さすがにこの広い会場内のどこにいるのかは分からぬ。

「じゃあ番号と名前呼びますので、順番に前に出て来て下さい」

レベル認定友の会のメンバーらしき人物が声を張り上げる。

「一番、海賊ラムズさん」

どうやら盗賊と海賊は同じ場所でレベル測定を実施するらしい。ラムズと呼ばれた瘦せて気弱そうな男が、冒険者として最低限必要な握力や柔軟性を測定し始める。

観客のために測定結果が会場中央に設置されている巨大な掲示板に表示された。

ラムズの測定結果は……最低だ。本人も恥ずかしそうに顔を赤らめている。これは相当緊張しそうだ。

次々と名前が呼ばれていく中で好成績を残していく者もいる。

「五十六番、盗賊ブレイブさん」

握力、ジャンプ力はまあまあの成績だ。身体の硬い俺は柔軟性はあまり良くない。それでも会場からはワツと歓声があがる。

「五十七番、海賊ノニオーライさん」

よりもよつて俺の次はあのキザ野郎か。

再び歓声があがつた。結果は俺と良い勝負の様だ。握力は奴の方があるが、ジャンプ力は俺の方がある。

「おおおおー！ 何だアイツ！」

戦士の測定会場で歓声があがつた。何とかレベル測定大会への参加が許された自称勇者のカリューが測定しているのだ。

ジャンプ力も握力も桁が違う。今のところ、戦士の中ではダントツトップだ。

「良い仲間をお持ちでござりますな」

いつの間にか隣に来ていたノニオーライが言う。近づく気配を感じさせなかつたところは、さすがレベル四十六だ。

別の会場では秋留もレベル測定をしているのだろうが、最初の筋力や体力の測定では目立つ事はないだろう。

「全員測定が終わりましたので、次は命中率と集中力の測定を行います！」

係員が再び叫ぶ。次の項目は俺が最も得意とする内容だ。

「では一番の海賊ラムズさんから～」

ガチガチに固まつたラムズが左手と左足を一緒に出しながら歩いていく。ありやあブレッシャーに負けたな。

「残念な事ですね。本来の力を出せないとは……。その点、ブレイブさんは大丈夫そうですね」

馴れ馴れしいノニオーライが一部だけ白く染まつている前髪を弄びつつ言った。

その後も本来の実力を出せない人が何人かいたようだが、暫くして再び俺の名前が呼ばれた。

俺は十メートル程離れたマトを睨みつける。

ちなみに命中率の測定では投げる武器は自分である程度選べるし、投げる時の動作でも技術点が付く。

俺は比較的得意な短剣を十本両手に持ち、投げラインに立つ。

「それでは始めて下さい」

係員の指示を受け、俺は集中力と高め再度マトを睨む。

そしてその場で前転や側転、ジャンプをしながら全ての短剣を投げつけた。

「シユタタタタン」

俺の投げた短剣は全てマトの中央に突き刺さつた。

会場からは歓声が上がる。

どこからか「さすがブレイブ、大好き！」という秋留の声が聞こえた気がする。幻聴ではないと思いたい……。

「幻聴ですよ、次は私ですので下がつてください」

俺の心の中を読んだノニオーラが前に入ってくる。さすがレベルの高い海賊だ。洞察力は俺よりもあるかも知れない。

ノニオーラも俺と同じ様に短剣を両手に持つて構える。

「はっ！」

気合と共に発した声と同時に全ての短剣がマトに突き刺さつた。

こいつ、腕の動きが俺より速い！

命中率測定の結果はノニオーラの圧勝だった。同時に短剣を投げて、同時にマトの中央に当てるのはかなりの技術が必要だからだ。俺もそこまでは出来る自信がない。

その後も集中力や反射神経の測定が続き、この測定大会の目玉でもある実践試験となつた。

『あー、では本日のメインイベントである実践試験です！』

拡声器から司会と思われる男の声が聞こえる。

盗賊の実践試験は、トラップの沢山ある館に侵入して宝を取つて来るという内容だ。

試験の進み具合は、頭がカメラになつているインスペクターという妖精から、中央の巨大スクリーンに映像が映し出されるという仕組みらしい。

ちなみに海賊の試験には実際に試験用の船を操るという内容もあるようだ。

『えー、まずは武道家の実践試験から始めます！』

武道家の実践試験はレベルの高い武道家と戦うという内容らしい。冒険者クラブでも有名な『ゴッドハンド』の異名を持つ武道家トリカローが姿を現す。その拳は全てを破壊する事が出来ると言わっている。

その伝説ともなつてゐるトリカローが相手とあつて、武道家達は舞い上がつてゐるようだ。

「結構頑張つたみたいだね」

実践試験の間は他の職業は休憩となるため、俺は秋留の隣まで来て武道家の試験を観戦する事にした。

「あの海賊野郎が中々しぶとくてね」

俺は秋留に答える。

「俺は単独一位だ。プレイブも秋留もまだまだだな」  
呼んでもいないのに自慢の鼻を使って俺達の居場所を探し当てたカリューが、隣で自慢して言った。

俺は盗賊の中では四位、秋留は幻想士の中では一位のようだ。  
世の中にはまだまだ上がいる事を実感する。ちなみにノーオーイは海賊の中で三位だ。

「はあつ！」

「やあつ！」

トリカローに正拳突きや回し蹴りを放つ、武道家の気合の入った声が聞こえてくる。

この実践試験ではあくまで武道家の力を測定することである。だからトリカローは反撃する事はない。その強靭な身体で武道家達の攻撃を防いだり避けたりしている。中にはトリカローに攻撃を当てる強者もいる。

「暇だな」

そう言つとカリューはその場で横になりイビキをかいて寝始めた。

俺と秋留はその場に座り込んでサービスの茶を飲む。

ぼけ～っと観戦する事一時間。どうやら武道家の実践は終わったようだ。

『続きまして、僧侶の……』

武道家以上に暇になると予想した俺は、カリューを見習つて寝る事にした。秋留も座りながらウトウトしている。

どれ位時間が経つただろうか。カリューの名前が呼ばれる声で俺は眼を覚ました。

「あ、起こそうと思っていたところだよ、いよいよカリューの番だよ」

寝ぼけ眼で戦士用の闘技場を見る。頑丈な鉄の柵で囲まれた闘技場の中心にカリューがいた。試験用の装備とロングソードを右手に持っている。

「戦士の実践試験は、ネクロマンサーによる擬似モンスター戦闘だよ」

秋留の説明と同時に鉄の柵の外にいた複数のネクロマンサーらしき男女が、呪文を唱え始めた。

一瞬でカリューは大小様々なモンスターに囲まる。

カリューの興奮している息遣いがここまで聞こえてくるようだ。

『それでは、単独トップの戦士カリューさんの実践試験を開始して下さい！』

アナウンスの人を若干睨みつけてカリューが回りのモンスターを斬りつけた。

その剣捌きは力強く荒々しい。しかし的確に敵の急所を突き、次々とゾンビモンスターを切り刻んでいく。

あまりの戦闘の速さに柵の外で呪文を唱えているネクロマンサー達の顔も険しくなる。

「ウオオオオオン！」

カリューの咆哮が会場中に響き渡る。

「凄いね」

「ああ、相変わらず人間離れしているな」

「ふふつ」

秋留が俺の台詞に小さく笑う。その笑顔がとても素敵だ。

「素敵なお笑顔ですね」

いつの間にやって来たのか、ノニオーライが秋留の顔を覗き込んで言った。俺の台詞を取りやがって！

「貴方も常に笑っているわね」

「え？ ええ、秋留さんを見ているとなぜか笑顔になってしまふんですよ」

再び片足をついてノーオーライが言つ。俺はネカーとネマーに手をかけた。

「俺はお前の趣味の悪いサングラス見ると笑顔になつちまうよ。俺の台詞にノーオーライの笑顔が固まる。」

「あはは！」

秋留の笑いを背にノーオーライが立ち去つていった。何となくスッキリした俺はカリューに眼を移す。

どうやら既に実践試験が終了したらしい。

「どうだつた？」

「人間とは思えない戦いつぱりだつたぞ」

俺の嫌味に気づかないカリューは「そうだろ？」と嬉しそうに答える。

「今日のレベル測定大会はこれで終わりみたいだね」

秋留が伸びをしながら立ち上がる。

「明日は俺と秋留の実践試験があるのかな？」

「え？ 私の実践試験はもう終わつたけど？」

秋留が衝撃的な回答をする。

どうやら俺が寝てている間に秋留の実践試験が終わつてしまつたようだ。

秋留が闘技場に行つた時も名前を呼ばれた時も気づかなかつた。まさか俺に変な呪文かけて眠らせていたんじや……と疑わしい眼

を秋留に投げかけたが、全然そんな風には見えない。

「私の実践が見れなくて残念だつたね、ブレイブ！」

悪戯っぽい笑顔に何も言えないまま、俺達はレベル測定会場を後にした。

明日はいよいよ最終日だ。

「皆さん、頑張りましたな」

大通りで俺達の帰りを待っていたジエットが言った。やはり自分が参加出来なかつた事で少し落ち込んでいるようだ。

「秋留殿の実践は見物でしたな。まさかあそこであんな幻想術を使うとはのお」

俺は無言でジエットを睨む。ジエットは不思議そうな顔をした。

「とりあえず腹が減つたな」

カリューの腹が豪快に鳴つているのが聞こえる。

俺達は馴染みの飯屋に入ると適当に空腹を満たして宿屋に戻つた。明日はより気合を入れて頑張らないと、賞品を他の奴に持つていかれてしまう。俺は意気込みを新たにし、ベッドに入るとすぐに眠りについた。

「ビヨオオオオオオ」

俺は風が唸る音で眼を覚ます。薄暗い部屋の時計の針を確認すると早朝を指していた。

まだ起きたのは少し早いが、俺は今日の実践試験のためにも起きる事にした。

一人装備を整えて宿屋の外に出てみると、予想通りの曇り空。雲は風のように速く流れている。

「ブレイブ、早いじゃん」

気づくと、髪の毛を横で結つた秋留が隣にいた。突風でめくれない様にスカートを抑えていた。その手は邪魔だろうとと思っていると、秋留の背中のマントが鋭い爪の形になつて俺に近づいた。

「ブレード、変態ブレイブの事なんてほつときな〜」

俺の邪まな考えに気づいたのか、秋留が背中で飼っているモンスターのブラッドマントが俺に威嚇してくる。

ブラッドマントはダンジョンの宝箱の中に潜み、モンスターだと知らずに装備してしまった冒険者の首を絞めて生き血を吸うという厄介なモンスターだ。

秋留はそのブラッドマントを手なずけ、ブレードーといつ頃前までつけて可愛がつている。

「生憎の天気だね」

「盗賊にとつては晴天よりもある程度曇つていたり、雨が降つたりする方がやりやすいのぞ」

自慢げに腕を組みながら言つ。

「ふふ、その調子で実践試験も頑張つてね」

秋留はそれだけ言うと宿屋の中に戻つていった。

俺を元気づけるためだけに、わざわざ起きてくれたのだろうか？

「まさかね」

俺は一人呴くと宿屋を布拉ブラと一周してから部屋に戻つた。

『えー、始まりました！ レベル測定大会最終日！ あー、本日はいくつかの職業の実践試験を残すのみとなりました！』

昨日と同じ元気の良いオッサンが司会を務めているようだ。

『えー、本日、天氣もあまりよくないようなので、早速始めさせて頂きます！』

うむうむ、良い事だ。オッサンの長い話を聞かされても何も乐しくない。

『あー、まずは盗賊・海賊混合によるトラップハウスへの挑戦を実施してもらいます！』

アナウンスと共に競技場にライトが浴びせられ、一軒の建物が姿を現した。

『えー、このトラップハウスの中に設置されているお宝を無事に取つてくるのが、実践試験の内容となります！』

『えー、進捗状況は一緒に同伴するインスペクターにより中央の大モニターに映し出されます！』

アナウンスの説明を聞いて、海賊一番バッターのラムズが早速ビビッている。

こうして盗賊・海賊の実践試験が始まつた。

いつも通り隣にはノーオーイがいる。

「昨日は良く寝れましたかな？」

「ああ、ぐつすりだ」

早朝に目が覚めてしまった事は勿論言わない。

中央の巨大スクリーンにはラムズの珍道中が映し出されている。頭に金ダライがぶつかったラムズが映し出され、会場からは笑い声が聞こえた。

「これは恥ずかしい。失敗は許されませんね」

ノーオーイが生睡を飲む。確かにこれはかなりのプレッシャーだ。俺はステージにある商品の山を見て再び闘志を燃やした。

何人かがプレッシャーに負けて醜態をさらすなか、とうとう俺の名前が呼ばれた。

「せいぜい、頑張つて下さいね」

ノーオーイの嫌味な台詞が後ろから聞こえてくる。

トラップの設置場所や内容は毎回変えられるため、先に試験をした人には参考にはならない。

俺は扉を慎重に調べてからトラップハウスへと進んだ。後ろからはインスペクターがついて来る。

中は薄暗くなっていた。

俺程の盗賊の腕であれば、これくらいの闇は何の問題もない。

足元の突起を慎重にかわす。頭上には金ダライがぶら下がっているのが見える。

「危険だ……」

俺は咳きながら更に廊下を進んだ。

目の前に扉があるのが見える。周りを十分に確認すると、廊下の壁に無数の穴があるのが確認出来た。

「失敗すると穴からケチャップ弾が出てくるんだな……」

先駆者達の中に、全身真っ赤になつてこのハウスから出でてきた者がいたのを思い出す。

集中しながら扉を調べた。鍵穴の中と扉の隙間に仕掛けがあるので

が見える。

一方、ドアノブには仕掛けはないようだ。

「なるほど」

俺は勢い良くドアノブを捻った。

何も無かつたかのように扉が開く。

「この扉には何もないのが正解だな」

俺はそのまま次の部屋に脚を踏み入れる。

その時、俺は脚の下に不気味な感触を受けた。咄嗟に後方に転がり、廊下に舞い戻る。

前方の壁に液体の弾がぶつかつた音がした。

「アブねえ、アブねえ……」

俺は特性ソース弾を避けながら再び前進する。

暫く進むと壁に梯子が設置されているのが見えた。いかにも怪しいがどうするか……。

この実践試験では、係員に渡された盜賊道具しか使用してはいけない。

俺は手渡された道具袋の中から簡易松明を取り出すと、手早く火を付けた。

梯子の方を照らすと、巨大な籠がぶら下がっているのが見える。

「トラップを発動させると、あの籠から不気味な物体が降つて来る。うだな」

俺は道具袋から短剣を取り出すと、梯子と梯子の間の壁に向かって投げつけた。

四本あつた短剣を全て壁に投げつける。

俺はその短剣を足場にして梯子代わりに二階に上っていく。

勿論使つた短剣は取り外しながら進む事を忘れない。

頭上の籠が落ちることなく、無事に二階に辿り着いた。

二階の床には不気味な突起がたくさんついているのが確認出来る。

「さてと……」

慎重に周りを見渡すと部屋の隅にタンスがあるのに気づいた。

俺は本能の赴くままにタンスを調べ始める。中には一本のロープと短剣。短剣の先端は釣り針のように鉤爪状になっている。

「なるほど」

発見した短剣にほどけないようにロープを結ぶ。ちなみに盜賊は取れないようなロープの結び方も出来ないといけない。

作成したロープ付き短剣を部屋中央の天井目掛けて勢い良く突き刺す。引っ張つても取れない。

俺はロープの方にしがみつき、部屋の反対側へと舞い降りた。着地と同時に「ガチンッ」という金属音が聞こえた。

俺は着地の勢いを殺さないようにそのまま前転をする。着地した場所に巨大な招き猫の置物が落下して砕け散った。

「おいおい、それは当たつたら痛いんじゃない？」  
誰かが聞いているはずと思い、大きめに独り言を呟つ。

「ヒュンッ」

風を切り裂く音を聞いて咄嗟に身体を壁際に寄せる。

俺の目の前を無数の小石が飛んだ。

「次から次へと……」

殺気を感じてもたれていた壁際から離れる。壁が大きく開いた。どうやら一階へと滑り落ちる罠のようだ。

その間も無数の小石が縦横無尽に飛びかう。

俺は今まで持っていた松明を前方に投げつけた。一瞬、小石を発射している無数の穴が見えた。

その場所を頭に記憶し、持っていた短剣を投げつける。

とりあえず、右端を歩けば小石に当たらなくて済む様にはなった。左端に小石が勢い良く飛ぶ廊下を突き進む。

「むうう……」

田の前に四桁の数字を入力させるパネル付きの扉が現れた。周りを見渡したがヒントとなるようなメモはない。

「暗号か……俺、苦手なんだよな？」

頭を抱えながら独り言を呟つ。後方にはインスペクターが無言でついてきている。まあ、喋られてもうざいけどな。

俺はモニターの向こうで見守っているであらう秋留を意識して、インスペクターのカメラを見つめた。

「ん？」

俺はインスペクターの腹の部分に何か書かれているのに気づいた。近づこうとすると一定の距離を保とうとしてインスペクターが離れる。

俺は視力に全神経を集中させた。

『扉は魔を封じた』

インスペクターの腹にはそう書かれている。

魔を封じた扉？ 恐らく目の前の扉の事を言つてしているのだろう。うへん……。

……。

魔というのは、魔族の事だらうか。魔族を封じる？ 何か聞いた事あるな。

確かジエットが活躍したのが第三次封魔大戦だつたな。あれは、一九九九年だつたよなあ。第一次とか二次の事は全然知らないし。俺は試しに数字のパネルに一九九九と入力してみた。「カチャツ」という音と共に目の前の扉が開く。

「ゴイーンッ」

脳天に金ダライが直撃した。目の前に星が舞う。

扉は開いたけど、罠が作動した……半分正解だつたという事か？ 俺はクラクラする頭を抱えながら部屋の奥に進む。外の会場ではさぞかし笑われている事だろう。ちくしょう！

目の前にある机の上に立派な短剣が三本並んでいる。

『一番、価値のあると思われる短剣を選んで、出口へと進め』

盗賊に必要なものに鑑定眼というものがある。俺はそれが苦手だ。

物の良し悪しが分からぬ。

俺は順番に短剣を持つて見比べる。

一番、装飾が豪華な短剣を右手に持つと『出口』と書かれた扉に手をかけた。

「！」

俺は空気の動きを察知して後方にジャンプする。目の前に金ダライが落ちた。

「最期まで危険なトラップハウスだつたな」

俺は金ダライを跨いで、トラップハウスの外へと出た。

会場からは拍手の嵐。「金ダライ当たった時の顔が面白かったぞ～！」という野次も聞こえてくる。俺は遠く離れた観客席でそう叫んでいたオッサンの顔を覚えた。盗賊の視力を舐めるなよ。

俺は最期に持つてきた短剣とトラップハウスに入るときに受け取った道具袋を返す。

「この短剣は見た目だけ立派なんですが、価値はそんなにないんですよ。残念でしたね」

係員は残念そうに言う。俺はもつと残念だ。

「いやあ、惜しかったですね。金ダライに当たらなければ結構高得点を狙えそうでしたのに」

近づいてきたノーオーイがまたしても嫌味を言う。  
暫くして、トラップの作り変えが終了し、ノーオーイがトラップハウスに侵入していった。

その映像が中央のモニターに表示される。

さすがにレベルが高いだけあって動きに無駄がない。俺がトラップを作動させて何とか避けたりしているのに対してもノーオーイはトラップの発動自体させていなかった。

悔しいがコイツは中々手強い。と目の前でノーオーイが地面に落ちていたバナナの皮でツルリと滑った。会場から様々な笑いが上がる。俺も思わず笑顔になってしまった。

恥ずかしそうに頭を支えながら映像の中のノーオーイが立ち上が

る。

その後は海賊特有の船の操縦などのテスト項目もあつたが、手際のいい操縦で見てる者を驚かせていた。殆ど何の失敗もなく最期の短剣は一番価値のある短剣を選んだようだ。

バナナの皮で滑つたせいか、ノーオーイは俺の方には来ずに離れた所に腰を下ろした。いい気味だ。

その後何人かの海賊や盗賊がトラップハウスに挑み、現在トップの盗賊ロシファアがトラップハウスに挑んだ。盗賊の間では流水ロシファアと呼ばれている凄腕だ。俺も何度かロシファアによつて盗られた後の宝箱に泣かされた事がある。

映像に写されたロシファアは正に流れる水のようだった。畠には全くかからず動きにも無駄がない。時折インスペクターに目線を投げかけて観客へのアピールも忘れない。

『えー、では、盗賊・海賊の全ての方の実践試験が終わりました！』  
昼前になつた頃、ようやく盗賊・海賊の実践試験が終わつた。

俺は秋留を探して隣に座る。反対側にはカリューも座つているが相手にはしない。

「お疲れ様、ブレイブ。惜しかつたね～」

「まあ、しようがないさ。流水ロシファアの試験を見せられると何も言えないや」

「修行が足りないな！」

落ち込んでいる俺に対し容赦なくカリューが言つ。いつか恥じかかせてやるからな、コイツ！

こうして俺達のレベル測定大会は終わつた。

カリューは戦士レベル五七で戦士の中ではトップ、秋留は幻想士レベル三八、俺は盗賊レベル三六だった。全員レベルはアップしていたが、カリューの上がり方が尋常ではない。

カリューは見事、レベル測定大会の戦士の部で優勝した。

賞金百万カリムを受け取り、風神の守りという首にぶら下げてい

るだけで魔法攻撃を弱めるというアイテムを副賞として貰っていた。

今はカリューが賞金で俺達に飯を奢ってくれている。

ここは焼肉屋・上々苑の一室。俺は遠慮する事なく特上ロースを食べていた。

「お前ら遠慮しないよな～」

カリューが俺達の食いつぱりを見て呟く。

俺も秋留もジェットも、ここなどばかりに高級な肉を食べまくっている。

安物とは違い口に入れた途端に肉はとろけ、旨みが口いっぱいに広がった。

「臨時収入なんだから気にしない〜」

秋留も珍しく沢山食べているようだ。実は幻想士の中で優勝出来なかつた事が悔しかつたのかもしれない。

「まあ、いいけどよ。この獣人化しているお陰で優勝出来たところもあるだろうし。これは俺の本来の力じゃねえや」

カリューもガツガツと白飯と肉を食べている。どうやら獣人化のせいでパワーアップしている事は気づいているらしい。

「レベル五七は凄いですな。ワシは五一だったんですけど、魔族の軍団長を倒した時は……」

ジョットが酒を飲みながら昔話を始める。

俺達はその後も楽しく気兼ねなく食事をして宿屋に帰つた。

## 第二章 依頼

「もう海の幸は食べ飽きたんだ！」

フォークに刺したイカフライを弄びつつ、カリューがまたしても文句を言っている。

「レベル測定大会は終わったものの……、船がない事には変わりがないからのお」

ジェットが食後のお茶を飲み干す。

レベル測定大会から三日が経過した。俺達はレベル測定大会前の退屈な日々に逆戻りしていた。

「さすがに暇だよね」

冷静な秋留にも若干焦りの色が見える。

アステカ大陸までの航路に出現する海賊は相当手強いらしい。船乗り達はいよいよ俺達をアステカ大陸まで運ぶ事を嫌がるようになってしまった。

しかもレベル測定大会最終日から続く悪天候。今、店屋の外は大荒れに荒れている。

その時ドカドカと俺達のテーブルに近づいてくる複数の人影があった。

フード付きのマントに全身を覆つた三人組みだ。

「ちょっとよろしいでしょうか？」

真ん中に立つていたのは男だと思っていたのだが、どうやら女性だつたようだ。

雨に塗れたフードを外すと眉毛がキリリとした強気な女性の顔が現れた。歳は三十位だろうか。

「何事ですか？」

俺達の保護者役のジェットが向きを代えて女性に聞く。

「レベル測定大会、拝見させて頂きました」

レベル測定大会に参加していないジェットは、少し申し訳無さそ

うにうつむいた。

「さすがはレッド・ツイスターと言つたところでしょうか……」

「俺達を褒めに来てくれたのか？」

先程からピリピリしている獣人のカリューが迫力満点な口で言つ。普通の女性なら卒倒してしまいそうな迫力だが、目の前の女性は臆する様子を微塵も見せない。

「では、早速本題に入りましょつ。空いてる席に座つてもいいから？」

カリューとジェットの間の空いている席に女性が座る。お供の二人がその後ろに立つた。

「まずは自己紹介から。わたくしの名前はイザベラ。武具屋を経営しています」

イザベラと名乗った女性は後方の二人の方を振り返り自己紹介を続ける。

「左が主人のリー、右が用心棒のクログローです」

イザベラの自己紹介を受けて背の高い男がフードを外す。<sup>アジリ</sup>亞細李<sup>アジリ</sup>大陸の物と思われる衣装を着こなす温和そうな眼をした男だ。真っ黒な髪を後ろで小さく縛っている。眼の間にあるホクロが目立つた。

ちなみに秋留は亞細李亞大陸出身だつたりする。

「知り合い？」

俺は小さく秋留に聞いてみた。

「亞細李亞大陸が他の大陸に比べて小さいからつて、そう簡単に知り合いに会つたりしないよ！」

秋留が口を膨らませて反論した。俺に馬鹿にされた事が分かつたらしい。

「老人と若造ばかりのパーティーが役に立つんですかい？」

クログローと紹介された黒色人種の男がダミ声でムカツク事を言う。危うくネカーとネマーを構えそうになつた。

「口を慎みなさい！ クログロー！」

何事の反論も許さない口調でイザベラがクログローに言つ。

「申し訳ございません、イザベラ様……」

体格の良いクログローが小さくなつた。いい氣味だ。

「で、武具屋の主人が私達に何のようですか？」

俺達パーティーの中で頭の回転がズバ抜けて良く、交渉事に強い秋留が答える。

交渉役が秋留だと気づいたイザベラが目の前の秋留に視線を投げた。その眼で俺達を踏みしめていくようだ。

「巷で聞いた噂なのですが、皆様、アステカ大陸に向かいたいとか……」

秋留は何も答えない。イザベラが一息置いて続ける。

「実は私達もアステカ大陸に急いで行かなければならぬ理由があります」

「……商売ね。大量の武器や防具をアステカ大陸に届けたい。それにはこの港町でいつまでも足止めを食つてゐる訳にはいかないと云つたところかな？」

イザベラの説明に秋留が間髪あけずに答えた。

イザベラは小さく微笑み、更に話を続ける。

「そこまで分かつていらつしやるなら、この先の話も分かつて頂けるかしら？」

「アステカ大陸行きの船にタダで乗せてあげる代わりに貴方達の護衛をしろと？」

「その通りで」「ざいます……」

そこまで話すと向かい合つた二人の視線が激しく交差し始めた。盗賊の俺の眼になら火花が見える……気がする。

……少し息苦しくなつてきた。

いつまで睨み合つてゐるつもりだろう。リーと呼ばれたイザベラの夫にも焦りが見える。

「仮に護衛に失敗した場合は？」

「その場で船を降りてもらおうかしら？」

沈黙を破つた秋留の台詞に鬼のような応答をイザベラが笑顔で返す。

「ふふ、楽しそうだね」

「ええ、今の時期なら十分に泳げますよ」

尚も女同士の熾烈な戦いは続く。

しかし俺の予想を裏切り、秋留が笑顔で続けた。

「任せて！ イザベラさん達の事は私達の命に代えても守つてみせるよ」

『え？』

周りで事の成り行きを見守つていた男達（店員や他の客を含む）が一斉に間抜けな声を挙げた。

今のはやりとりで、二人の女性はどうして円満解決な顔をしていられるのだろうか？

「頼りにしてるわよ、レッド・ツイスターの皆さん」

イザベラが俺達の顔を見渡しながら言つ。その言葉に対しても思わず苦笑いで返す。

「さて、話はまとまりましたが、これから提案させてもらいたい事があります」

紅茶を一杯飲んでイザベラが言つた。次は何を言われるのかドキドキしてしまう。

「先程クログローが言つた言葉、全く考えていない」という訳ではありません

俺が露骨にムカついた「役に立つか」という台詞だらう。それ以外には奴は何も喋つていない。

「明日の朝九時、文芸堂という劇場の前でお待ちしています」

そう言つとイザベラとお供の一人は席を立つた。その手には俺達の昼食の伝票を握つてている。

「ではまた明日……」

再び三人はフードを被ると店を出て行つた。

会計を済ませる時に「領収書を……武有夢商会で……」という言

葉は聞き逃さなかつた。さすが商人は一味違う。俺以上に金に関するほうのさそだ。

『…………』

一同、暫しの沈黙。

「ふふ、結局タダで船に乗れるんだからオッケーでしょ」

秋留が嬉しそうに言う。

確かに話の内容的には俺達に不利な気がしたが、払う予定だった船代を払わずに済んだのは確かだ。

「カリューも悪い海賊とかモンスターが襲つてきたら、正義の名の下に切り伏せちゃつてね」

「正義……。おう！ 任せろ！」

今まで放心状態だったカリューがガツツポーズで答える。こいつは単純で良いな。

「ブレイブもオッケーだよね？」

「勿論！ 余計な金を払わずに済んで良かつたな。船に乗つて何かに襲われれば戦うのは当たり前だしな」

例え異論があつたとしても、そんな可愛い顔で「オッケーだよね？」と言わなければ頷くしかない。

「ワシも勿論、秋留殿に文句などないですぞ」

秋留の下僕であるジェットはお茶をズズズと飲んだ。

翌朝もヤードは荒れていた。この時期特有の台風が近づいてきているらしい。宿屋の目の前の通りは葉や紙ぐずが散らかっている。朝早くから掃除をしている元気なオバちゃんの姿も見える。

「いつになつたら晴れるのかのあ」

顔に張りついた紙切れを、律儀に近くのゴミ箱に捨ててジェットが言った。

「とにかく、やつとの大陸ともオサラバ出来そうで何よりだ」

カリューがデカイ口で豪快に笑う。朝早くから近所迷惑な奴だ。

俺達はイザベラに指定された文芸堂という劇場を目指して、人気も

まばらな大通りを歩き始めた。

向かい風で少し歩きにくかつたが、俺達は予定の三十分前に文芸堂の前の広場に到着した。

広場のベンチに思いがけない奴が座っているのに気づく。

「おや、盗賊プレイブさんとその仲間達じゃないですか」

趣味の悪いサングラスを直しつつ、海賊ノニオーラが近づいてきた。

レベル測定大会の時と同様に白いスーツに身を包んでいる。

ノニオーラの周りに個性豊かな顔ぶれが集まつて来た。同じパーティーのメンバーだろうか？

「あら？ お知り合いだったの？」

俺達の後ろからイザベラが近づいてきて言った。その左右には昨日と同じようにリーとクログローが控えている。

イザベラ達は文芸堂の前に立つて俺達の方を振り返った。今気づいたのだが、リーとクログローの肩には妖精インスペクターが数匹乗っかっている。

「お知り合いでも関係はありません。これから貴方達二つのパーティーに勝負をしてもらいます」

单刀直入にイザベラが言つ。

「へっ！ こんなショボイ奴らと勝負しろだど？」

少し離れた場所にある石垣に座つていた男がイザベラの言葉に反応する。緑色の服に身を包んだ男はタバコをくわえた口から煙を吐き出した。

緑色の帽子を被り右目は真っ白い髪で隠れていて見えないが、左目にはスコープの様な物を装備している。職業は銃士だろうか。

「おい！ ガロン！ そんな事を言つたら失礼だろう！」

魚屋のようなゴムのツナギを穿いた男が注意する。あいつはビックリで見た事あるぞ。

「ラムズは正面目過ぎるんだ。だからレベル測定大会で恥ずかしい結果になるんだぞ」

どこかで見た事ある顔だと思つたらトップバッターの海賊ラムズ  
だつたか。まさかノーオーイのパーティーのメンバーだつたとは…  
。

「 ひらひら、仲良くしろ！」

ノーオーイが間に割つて入る。サングラスの向こう側でノーオーイの力強い視線を感じた。

「 なかなか楽しそうなパーティーだな」

俺は皮肉を込めて言つたがノーオーイは動じない。

「 役者が揃つたところで早速説明させてもらおうかしら」  
イザベラが一歩前に出る。お付の一人もそれに続いた。

「 これから一人ひとりにインスペクターを渡します」

イザベラの説明と共にお付の一人がそれぞれのパーティーのメンバーにインスペクターを一匹ずつ渡す。

あれ？ 向こうのパーティーのインスペクターが一匹多いぞ。

「 ! なんだ、そいつは？」

カリューがノーオーイに向かつて指をさす。いや、正確にはノーオーイの真後ろだ。

「 拙者、染次郎そめじろうと申す。以後、お見知りおきを」

ノーオーイの後ろから声が聞こえたが、気配だけで姿は見えない。

「 こいつは気にするな。イザベラさん、説明を続けてください」  
無口な染次郎に代わって、目立ったがり屋のノーオーイが先を促す。

冷静なイザベラは暫く固まつていたが、気を取り直して再び説明し始めた。

「 これから互いのパーティーに、内容の異なる紙を一枚渡します…

」

イザベラの説明によると、要するに俺達にこの港町を舞台にした宝探しゲームをしろという事らしかった。

最終的に辿り着く宝のありかは互いのパーティーで同じらしい。  
相手のパーティーの邪魔をするのも自由という事だった。その説

明を聞いた時のノニオーライ達の憎たらしい顔は忘れない。ちなみに同じタイミングで秋留が小悪魔の様な顔をしたのは気のせいだらうか。

「おほん！……それでは……」

イザベラの説明が終わると、後ろで控えていたクログローが前へ一步出て言った。

「依頼争奪！ パーティーバトル！ スタート！」

「炎の精霊イフリートよ……」

秋留は突然、イザベラから受け取った宝探しの紙を俺の懷に押し込むと呪文を唱え始めた。

と同時に俺は背後からの殺氣を感じて体勢を低くする。

目の前の地面に手裏剣が突き刺さった。

「ほほう、やりますな」

声はするけど姿は見せない。

「邪魔するのはオッケーだけど、殺したりするのは勿論駄目だよー！」

イザベラが少し不安そうに叫ぶ。

「大丈夫でござるよ。手裏剣に当たつたらいでは死んだりせんよ相変わらず姿の見せない染次郎が言う。死なないだらうけど当たつたら痛いぞ。

「炎の弾丸で敵を撃ち抜け！ ファイヤーバレット！」

秋留が呪文の詠唱を終え、ノニオーライの方へ魔法と放つ。

しかし魔法はノニオーライの後方にあるラムズにぶち当たる。

「！ 狙いはメモか！」

確かにイザベラからの宝探しメモはラムズが受け取っていた。ノニオーライがうろたえて叫んだが既にラムズは黒焦げに……。

「だ、駄目だつたみたい」

秋留が肩を落とす。殺すつもりだつたのか？

ラムズの方に眼を移すと、ラムズを守る様に亀の甲羅が……。俺達の頭の上にクエスチョンマークが現れる。

「海で知り合つた龜のモンスターのタトール。……俺の友達なんだ」ラムズは龜のモンスターから顔を出して言った。こいつ獸使いか！しかしょりによつてタトールとは……。俺の人間の知り合いでタトールといつのがいる。あまり良いネーミングセンスとは言えない。

「プレイブ！ 置いてくよ！」

気づくと俺以外のメンバーは文芸堂の前の通りから細い路地に入る所だった。

俺はノニオーライ達を睨み付けると秋留達を追つて走り始めた。

「メモを焼き尽くしちゃう作戦は失敗だね」

秋留が走りながら言う。

『邪魔をするのも自由』と聞いた時の秋留の小悪魔のよつな顔は見間違ひではなかつたようだ。

「それで、こいつのメモはどんな内容なんだ？」

「自分で持つてるでしょ？」

秋留が言う。

そういうえば、秋留が魔法を唱える前に俺の懐にメモを突っ込んでいたな。

俺は走りながら折りたたんであつたメモを開く。

『三枚の貝』

短っ！

俺は心配になつて秋留の方を振り向く。

「もうメモの内容は見たし場所は検討がついたよ  
さすが我がパーティーの頭脳。

メモの内容を見る暇も無かつたような気がしたが……。俺は羨望の眼差しで秋留を見る。

「何か匂うぞ」

カリューが鼻をヒクヒクさせながら言った。秋留に見とれていて、うつかりしていたが確かに油の匂いがする。

「散るんだ！」

秋留を抱きかかえて俺は叫んだ。後方から炎が吹き上がつた。

一  
おわ  
「

素早さのあまりない老人のジエットが燃える。

カリューが野生の勘なのか、路地の両壁を蹴りながら建物の屋根に上る。

その時俺は前方に気配を感じて秋留を壁側に押し出した。俺と秋留の間へ再び二度リバウンドして、音が止む。

「また避けられた

前方の路地の影から再び染次郎が姿を現して呴く。

しがキ焼える何間をほーとくとほー死忍た

げながらピクピクしている。だが放つておけばジエットは勝手に回復する。

染次郎の気配が再び消えた。

俺達は気を取り直して再び走り始める。煙を上げながら「シニヤー」も後を追ってきていた。

「何で屋根に上ったんだ？」

۱۶

野生の勘定

カリエーの回答に思わず噴出しそうになる。

俺は心の中で「アホか」と呟くと、再び染次郎からの攻撃を警戒して辺りを観察し始めた。

秋留が言つ。

俺達は今まで数々の依頼をこなしてきた。しかし今回のように邪魔者がいたり謎解きがメインだったりはした事がない。

「うう、この辺で迷子にならぬよう、おまかせだよ。」

「……ノーオーイ達がどの辺にいるか分かる?」

秋留の問いに俺は神経を張り巡らせる範囲を広げた。

暫く走りながら広範囲で辺りに注意を払つたが何も気配を感じない。まあ、奴ら海賊パーティーだから気配とか消すのは苦手じやないはず……。

「やっぱり駄目そつかあ。こつちも偵察隊を出したいんだけどね」秋留の言う偵察隊とは妨害実行隊みたいなものだろう。秋留の事を心から敵に回したくないと思つ。

「つと、この辺のはずだよ」

秋留が路地の中心で突然立ち止まる。周りを見渡すと何やら少し見覚えのある感じ……。

上を見上げるとシェル・シェル・シェルの看板が屋根に取り付けてあつた。

「そうか。

ここは以前、黒猫の獣人に襲われた時に逃げ込んだ路地だ。俺はその時にあの看板を打ち落としたはずだ。

「三枚の貝、……でしょ？」

秋留が可愛らしく言つた。確かにシェルとは貝の事だが、一体どこに次のメモがあるのだろう。

俺は建物の屋根に上つて近くで三枚の貝の看板を観察する。看板の裏側に回ると手紙が貼り付けられているのに気づいた。

板から手紙をはがした瞬間、またしても御馴染みの気配を察知して、俺は建物の屋根から路地に音を立てずに飛び降りる。

俺の軌跡を追うように屋根や壁に炎が上がつた。

カリュー や ジェットが周りを窺いながら身構える。今度はカリューは野生の勘で飛び出したりはしないようだ。

「また……」

染次郎の落ち着いた声が頭上から聞こえた。カリューが柱や壁を使つて器用に屋根に上る。

「避けられた……」

今度は後ろから声が発せられる。こいつ何者だ！

「我が忍びの動きについて来れるとは……」

染次郎が俺達の目の前に出現した。カリューが屋根の上から染次郎に向かつて飛び蹴りを繰り出す。

蹴りが当たつた染次郎の身体が路地の壁にぶち当たつた。

「うぐつ！」

カリューの後ろから染次郎が出現し、カリューの首を絞める。先程カリューが蹴り飛ばしたのは、人間大の丸太だ……。いつの間に

……。

「ガルウッ！」

カリューが染次郎の腕を掴んでそのまま染次郎を投げ飛ばす。その動きはさすがに染次郎も予測していなかつたのか、地面に思いつきり背中を打ちつけた。

染次郎はそのまま転がり、俺達から少し離れた場所で振り向く。「きゅ、急所を絞めていたのだが……『タラメな身体の作りをしておる……』

そう言つと煙と共に染次郎は再び姿を消した。

「むへへへ！　あいつ邪魔へへへ！」

秋留はカンシャクを起こす寸前のことだ。

それでも冷静に俺から次のメモを受け取り内容を読み上げた。

『太陽と大地の間の逆上する水』

暫く考え込む秋留。

俺やカリューは考え方ともしない。ジェットは少し疲れたのか、背中のリュックから水筒を取り出しお茶を飲み始めた。

「あんた達、少しは考えようとしてよね！」

秋留は少し膨れて言うと来た道を戻り始めた。

「何だ？　何か分かったのか？」

少し申し訳無さそうに俺は聞いた。

「太陽と大地……この二種類がある物つて何か思いつかない？」

秋留が得意気に説明し始める。俺達は少し考えたが何も出てこな

い。

「はあ……。教会だよ、教会なるほど。

確かに教会には太陽神を崇めるラーズ教と、大地を創造したと言われるガイア神を崇めるガイア教がある。

その間の逆上する水に次のメモがあるといつ事か！……逆上する水？

「逆上する水がよく分からぬから、この町の地図をすぐ近くにあった案内板で確認するの」

俺の疑問を察知したのか秋留が答えてくれた。

俺達はすぐに案内板の前に来た。小さな広場になつてゐるため、近くには俺達が何をしているのか知らない一般人の姿も見える。

「この港町にはそれぞれの教会が一つずつあるみたいだね」

基本的にあまり教会には縁が無い俺達冒険者は、教会の場所をあまり知らなかつたりする。

「それぞれの間にある物で逆上する水を意味するよつなものは……」

秋留が案内版の地図を指でなぞつて考え込む。俺達も注意されっぱかりなので、真剣に考えるフリをする。

「あつた！　こここの銭湯！　水が逆上して熱くなつてお湯になる！」

秋留が嬉しさのあまり大声で叫ぶ。

その時、俺達の後方で再び御馴染みの気配が。咄嗟に俺はネカーとネマーを構えて後ろを振り向く。それにつられて仲間達も後方を振り返る。

「なるほど……銭湯か……悪いが先回りさせてもらおう」

俺がネカーの引き金を引いた時は既に遅かった。誰もいなくなつた広場の石畳に硬貨が転がる。

「い、急ごう！　奴の事だから次のメモを焼き灰へすつもりだぞ！」

俺は叫んでから銭湯に走り出そうとした。

「ふふふ」

秋留が不気味に笑う。染次郎の相次ぐ妨害のせいと、とうとうキしてしまったのだろうか。

「銭湯は、ウ・ソ！」

秋留が可愛く微笑みながら言つ。その笑顔に飛び込みたい。

「邪魔次郎が近くにいて、次のメモを焼き尽くしてやる」と考へて  
いると思つたからね」

俺達は改めて秋留の頭脳に关心する。しかも邪魔次郎とは良いネ  
ーミングだ。

「確かに逆上する水の説明として銭湯は悪くないけどね」

秋留が走り始めるのを見て俺達は後を追う。

「銭湯は教会の間じやないの。邪魔次郎がもつ少し細かく観察して  
れば気づいたはずなんだけどね」

「じゃあ間にあるのは何なんだ？」

カリューがワクワクして聞く。このゲームを楽しんでいるようだ。  
しかし勝負に負けたら人間に戻るために船に乗れなくなるかもし  
れない、という事を忘れているんじゃないだろうか。

「噴水」

秋留が言つ。確かに噴水は水が下から上に舞い上がる。正に逆上  
とこう訳か……。

俺達は邪魔次郎の妨害に会わずに無事に目的の噴水に着いた。  
噴水の中央の女神像の左手にメモが挟まっているのが見える。そ  
の女神像はまるで秋留のようだ。

「くだらない事考えてなくて良いから早く取つてきて！」

秋留が俺の考えを見抜いたかのようにズバリと言つ。

俺は噴水の水で濡れないように器用に女神像の左手からメモを抜  
き取る。

「そろそろ最期のメモじゃないかなー？」

手渡したメモを秋留が開く。

『兵共が夢の跡』

またしても短い文章だ。これだけで秋留は次の場所が分かるのだ  
らうか。

「やつぱりね」

まるで予想していたかのようにならはは滋くと再び走り始めた。

「次はどこなんだ？」

カリューに先を越されないよう俺は素早く聞いた。

「今まで沢山の人があつて争っていた場所は？」

秋留が俺に聞いてくる。

今まで争つていた場所？ 戰闘してた場所だろうか？

「レベル測定大会の会場だよ！ 急ぐよ！」

そうか。つてさつきから納得してばかりの自分が少し情けなくな  
る。

今まで冒険者達が争つっていた場所。

正に兵共が夢の跡だ。

「何でインスペクターを渡されたかを考えてたんだよね  
走りながら秋留が推理モードになっていく。

「でイザベラは立派な商人つていう事を考えると……」

目の前の突き当たりを右に曲がる。レベル測定会場だった場所は  
この先だ。

「レベル測定大会の会場をそのまま壊すには勿体無い。何かに使え  
ないか……」

秋留はまるでイザベラになつたかのように考え始める。

「そ、それじゃあ！」

俺は最悪のシナリオを思い浮かべて叫んだ。

「良い見世物になつたようだね」

レベル測定会場にゲートが見える。

ゲートには『生中継・冒険者達の戦い』と大きく書かれている。

その下には『入場料千カリム』とある。秋留の予想通り俺達は見  
世物にされたようだ。今更文句も言えない。

「ガルルルルルル！」

カリューもようやく気づいたのか自分の肩に乗っているインスペ  
クターに対して唸つた。それじゃあファンサービス以外の何物でも  
ないぞ。客が喜ぶだけだ。

『ワアアアアア』

会場から一斉に歓声が上がる。客入りは上々の様だ。

会場の中央にはモニターがメンバーの数分設置されていて、俺の顔もドアップで映し出されている。

俺達が会場に入つたすぐ後に再び歓声が沸きあがる。

後ろを少し確認するとノニオーライ達のパーティーが入ってきたところだつた。

「染次郎の奴め……失敗したか！」

俺達の後方を走るノニオーライが呟いたのが聞こえた。

「タ、タトール！」

ラムズは亀のモンスターに合図を送る。タトールは凄い勢いで俺達の前に立ちはだかつた。そしてその小さな口から大量の水を吐き出す。

俺達は勢い良く流れてきた水で足元をすくわれた。ついでに後ろを走つっていたノニオーライ達の足もすくう。何をやつているんだ……

「ラムズ！ 落ち着け！」

体勢を立て直してノニオーライが叫ぶ。

「二、こんなに人がいて落ち着けるかあ～」

ラムズは極端なあがり症のようだ。この観客がいなければ十分な力が発揮出来るのだろう。勿論レベル測定大会の時も。

その時、あまり存在感のなかつたガロンと呼ばれていた男が、手に持つていた銃を音を立てて伸ばした。

「危ない！」

俺は最優先に秋留の身体を押し倒す。

ガロンの持つていた銃から弾丸が飛び出した。俺と秋留の頭上を複数の弾が通り過ぎる。こいつ、ぶつ放しやがつた！

「痛えぞ！」

弾の当たつたカリューが頭を支えながらガロンに飛び掛る。

普通弾が当たつたら「痛い」じゃ済まないはずですけど……。

「やっぱり石弾じゃあ威力はあんまりないか～」

ガロンがタバコの煙をフフと吐き出す。石弾？ 石の弾丸ということだろうか。

カリューがガロンに拳を繰り出す。その攻撃をガロンは銃身で防ぐ。

「お主等、騙したな……」

「しつこい！」

秋留が振り向き様に持つていた杖を振り回す。その攻撃が見事に顔面にヒットした。

「あれ？ 当たっちゃった……」

その場に染次郎は倒れた。

「馬鹿野郎！ 先にお宝取つちまえばこいつの勝ちだつたのに！」

ノニオーライが猛ダッシュしながら近づいてくる。

カリューとガロンは激しい攻防を繰り広げている。カリューの攻撃をギリギリでかわしているところを見ると、ガロンも相当の腕に違いない。

俺達も負けないように会場中央に設置されている宝箱目指して走り始めた。しかしノニオーライの方が俺達より素早さが上のようだ。

ジョットが振り返つてノニオーライを迎撃つ。

「とわあっ！」

ジョットがレイピアを鞘に入れながら振り回す。その攻撃をノニオーライは難なくかわしてジョットに足払いを仕掛ける。ジョットが難なく倒された。

「舐めるなよお！」

ノニオーライは叫ぶと大きく踏み込んだ。俺達の頭上をノニオーライの身体が通り過ぎる。俺は宙を舞うノニオーライの白い上着を、咄嗟に右手で掴んで思いつきり地面に叩き付けた。

「ぐふつ」

ノニオーライから声が漏れる。

俺は更にノニオーライを踏みつけながら宝箱に向かつてダッシュした。秋留もそのまま走り続けている。

「あ……」

秋留が田の前を見て小さく声をあげた。

それにつられて俺も前方の宝箱を見る。

そこには宝箱を開けているタコール……いやタトールがいた。

「か、勝ちかな？」

後ろからタトールを操っているラムズのオドオドした声が聞こえた。あがり症に負けた……。

「皆さん、お疲れ様でした」

首謀者のイザベラが現れた。その顔はショーンが上手くいった事を心から喜んでいるようだ。

ここにはレベル測定会場の隣に設置された小さなテントの中。あの後クログローとリーから観客に対しての終了の説明がされ、見世物はお開きとなつた。

「よくも見世物にしてくれたな！」

結局、ガロンとの決着もつかないままに強制的にテントに連れて来られたカリューが文句を言つていて。少し離れた所でガロン自身も不満そうにタバコを吸つている。

「見世物にしない、とは言つてないでしょ？」「

イザベラが言つた。確かにその通りだ。俺達では何も言い返せない。救いの眼を秋留に向けたが、秋留は勝負に負けた事が悔しくてそれどころではないようだ。

「ふつふつふ。結局勝ったのは俺達だったな」

ノニオーライが自信たっぷりに言つ。俺達はあがり症のラムズに負けたのだ。ある意味、ノニオーライに負けるよりショックが大きい。

「それでは依頼はノニオーライさん達にお願いする、という事でいいかしらね？」

それを聞いてカリューが真っ白になつた。勝負に負けるイコール船に乗れない、という事を今更思い出したようだ。

「…………と言いたんだけどね

イザベラが話を続ける。

「依頼は両パーティーにお願いするわ」

『えへへ』

イザベラ以外のテントにいる全員が驚く。

「おいおい！俺は納得しないぞ！何のために勝負したと思つて  
いるんだ！」

ノニオーライがイザベラに近づいて睨みつける。

しかし強気なイザベラは全く臆することもなく言い放つ。

「どちらかのパーティーを雇う、とは言つてません。それに勝負の  
内容を見て、両パーティーの実力は素晴らしいものと分かりました  
ので」

それを聞くとノニオーライは黙つて後ろに下がった。勿論、すれ違  
い様に俺達を睨む事を忘れてはいない。

「時間がないので早速、明日の早朝に出航したいと思います」

冒険者はいつ何が起こるか分からぬから、いつでも出発できる  
準備はしてある。

「既に荷物は詰め込み終わっています。船や荷物を海に棲むモンス  
ターや危険な海賊から守るのが、貴方達の仕事です」

イザベラが簡単に説明する。

「それでは明日からお願ひしますね」

一方的に話すとイザベラ達はテントから出て行つた。

残つたがみ合う二つのパーティーも自分達の宿に戻り始める。  
外の会場は既に解体作業が始まっていた。

## 第三章 船出

台風が近づいてきて、このう疇は本当だつたようだ。  
翌朝も海は大荒れに荒れていた。田代とて天候は悪くなつていて  
ようだ。

しかし港で待っていたイザベラは出航を延期しようとは考へてい  
ない。

「武具の納期が迫つているの。これ以上遅れたら商売にならなくな  
つてしまつわ」

イザベラは力強く言つた。この辺に商人という職業の凄さを感じ  
る。

「ちなみにお前らは船酔いとかしないのか？」

近くで出航準備を手伝つていたガロンが聞いてきた。俺達は船の  
事は分からぬため、近くで作業を見物している。

「つるせえ！ 自分の仕事をしてろ！」

カリューがガロンに向かつて唸る。実はカリューは船に弱いのだ。  
以前、俺達がパーティーを組んだゴールドウイッシュ大陸から船  
に乗つた事があるのだが、その時カリューは酷い船酔いに襲われて  
いた。

「まあ、この荒れ方、じゃあ、船酔いするとかしないとかはあんまり  
関係ないかもしけないけどなあ～」

ガロンが意地悪く言って立ち去つた。

確かにこんな状態での船旅はした事がない。俺は人生経験豊富な  
ジェットを見た。

「さすがにワシもここまで荒れた海を旅した事はないのよ  
ほとんどの大陸を制覇しているジェットが答えた。

「ほおおおおおお～」と田の前の船の煙突から煙が吹き上げる。

俺達が乗る船はちょっとしたダンスパーティーが開けるくらいの

大きさだ。船底の方にある倉庫に沢山の武具が積み込まれているらしい。後でイザベラから詳しい説明があるはずだが……。

しい。後でイザベラから詳しい説明があるはずだが、ちなんに船乗り達の話を盗み聞いたところによると、

ちなみに船乗り達の話を盗み聞いたところによると、この船は魔動船という種類らしい。動力部に積んだ魔力を込めた石と蒸気の力により動いているという事だ。

こういつた魔力や蒸気を乗り物や武具に応用する技術は、魔族の本拠地があるとされているワグレスク大陸から伝わってきたものだ。

「そろそろ出発するわよ」

イサヘ六が強風で乱れる髪を押さえながら近づいてきた  
その辺にはリーヒカロガロヒがいる。そしてイザギラの空

さな子供が抱きかかえられている。

卷之三

俺達の疑問に答えるようにイサベラが言う。リニアと紹介された子供は小さくお辞儀をした。その大きな目で俺達を観察している。「危険な旅に連れて行くのはどうなのか、と何度も言われた事があるんだけどね。私自身が小さい頃に一人ぼっちの日々を送っていたから、この子には寂しい思いをさせたくないのよ」

今まで力強かつたイサベテが突然優しい口調になつた。

安心して下さい。ご家族全員の命は何としても守りますから」秋留がリュウに微笑みかけながら言った。その微笑を俺に対しても

もして欲しいものだ。

その後、イザベラから船の説明があつた。

待機する場所や荷物の場所、そして重要なイザベラ達がいる部屋。俺達はその場所を頭に叩き込んで、船と港をつなぐ木製の橋を渡つた。海が相当荒れているため、港に止まっている船でも十分に揺れる。カリューは具合の悪そうな顔をし始めた。

卷之三

船長と思われる黒いビフレの男が叫ぶ。

船員達の手によつて船と港をつなぐ橋が外され、船のイカリが巻き上げられた。

重い音を立てつつ静かに船が動き始めた。あまりの強風で帆は張つていながら、それでも動くというのが魔動船の特徴だろう。

頭上を見上げるとメインマストの見張り台にガロンがいる。そして船長の隣にはノニオーライ、船尾の椅子にラムズが座っている。染次郎は……どこかにいるのだろう。

「そ、外にいるのは危険だ……部屋に入ろう……」

いつもの迫力が全くない感じでカリューが言った。

俺達は哀れみの眼でカリューを見ると頷いて部屋に入つていった。

部屋の中も外と変わらずに危険だった。

あまりの船の揺れつぶりに物は落ちるはカリューは転がるはで大変だ。船酔いのしない俺達も早くも体力を消耗し始めてしまった。俺は気分転換に再び甲板に出ることにした。

「待つて。私も行くよ」

少し顔が青ざめてきた秋留が俺についてくる。いつもクールな秋留もさすがに少し辛そうだ。

死人であるジェットは、カリューがこれ以上転がらないように面倒を見ている。

甲板は強風にプラスして横殴りの雨も降つてきていた。

「そっちのロープ引っ張れ」

「水もつとかき出せ！」

船員達が忙しく働いている。ノニオーライ達のパーティーもそれぞれの仕事をこなしているようだ。俺達はあくまで対モンスターや海賊相手。出番が来るまでは暇だ。

「こんな所に出てきたら危ないぞ」

クログローが俺達の後ろから声を掛ける。少し前から気配には気づいていたが無視をしていた。

「あなたは危なくないのか？」

俺は嫌味を込めて言い返す。

「俺は元獵師だからな。これくらいの時代じゃあビクともしない」

確かに獵師にピッタリな見た目だ。真っ黒な肌に筋骨隆々とした身体。そして腰にさしたロッド……？

「元獵師？ クログローさんは職業は何なの？」

秋留が聞く。

「クログローと呼んでくれて結構だぞ。俺はガイア教の司祭だ」

『えー！』

俺と秋留は息もピッタリに叫ぶ。さすが将来のオシドリ夫婦だ。

「何だ？ 司祭には見えないか？」

『見えない』

再び声を合わせて言う。

俺達は暫くクログローと話した後、更に海が荒ってきたので近くのロープを自分の身体のベルトに取り付けた。秋留も同じく身体にロープを取り付ける。

「こうしておけば、最悪荒れた海に投げ出される事はなくなる」クログローが親切に教えてくれた。案外こいつは良い奴かもしれないと。

嵐の音に負けないほど派手な音を立てて、一際大きな波が上がった。

いや、波じゃない！

「秋留！」

目の前から突然現れたイルカ五頭程の大きさの魚モンスターが、俺達の乗る船に体当たりを仕掛けてきた。

小さく船が揺れる。

俺はバランスを保ちながらネマーとネマーで魚モンスターを撃つ。しかし波に阻まれて弾の威力が落ちているらしく、モンスターの硬い鱗を少し傷つける程度だ。

「スプラッシュサンダー！」

呪文の詠唱を終えた秋留が叫ぶ。

上空に出現した黒雲から魚モンスター目掛けて稻妻が走る。

「ひきやーー！」

不気味な叫び声を上げて魚モンスターの身体が硬直する。そのまま魚モンスターは息絶え海底へと沈んでいった。

「さすがですね」

いつの間にか後ろにはノニオーライがいた。この大きく揺れる船の上で何事もないかのように直立している。

「海のモンスターには雷系の魔法が絶大な威力を發揮しますからねえ」

ノニオーライがイヤらしい眼つきで雨や海水に濡れた秋留の身体を凝視する。俺はさりげなく秋留の前に立ち視界を防いだ。

「ふつ。この船にはシャワー室もあるらしいぞ。海に慣れていない奴はすぐに風邪を引くからな。暖かくする事だな……」

またしてもムカツク事を言つてノニオーライは去つていった。

「まあ口は悪いが……奴の操船技術は実際大したもんだつたぞ」隣で黙つて事の成り行きを見守つていたクログローが言つた。確かにレベル測定大会の時はそれなりな操船技術を披露していたようだが……。

決してノニオーライの忠告を聞いた訳ではないが、船の揺れも激しくなってきたので、カリューがくたばつているであろう船室へと戻る事にした。

「酷い揺れですなあ……」

顔を真っ青にして前より幾分かゲッソリしたように見えるカリューの隣で、これまた色白い顔を更に青白くしたジェットが言つ。

「いい加減、この天気は何とかして欲しいよね」

秋留も少し気持ち悪そうだ。ちなみに俺は先程トイレに行つてぶつ放してきたところだ。外が見える小さいガラス窓に映る自分の顔も相当青い。

「こ、これじゃあ襲われた時にまともに戦えないよな」

俺は深呼吸をしながら言つた。

「何かあった時に戦えないんじゃ困るからね。皆で少し横になろう

か

秋留は何とか冷静さを保つているようだ。

俺達（と言つてもカリューは返事出来る状態ではないが）は秋留の意見に賛成すると、簡易ベッドに横になった。

幾分静かになつた波の音が聞こえてくる。船の揺れも少しあさまつたようだ。向かいのベッドに寝ていたはずの秋留とジェットの姿がない。

ちなみにカリューは俺の下のベッドで相変わらずくたばつてている。船室から甲板に上る階段を上り、鉄製の重い扉を開ける。外は少し明るい。空に広がる暗雲の隙間から光が漏れているのが確認出来た。

「予想通りにへバつっていたようだな」

ロープの束を持つて通り過ぎ様にガロンが言つた。あいつら俺達の事を馬鹿にしていたに違いない。まあ予想通りへバつてましたけどね。

船の先端に近いベンチに秋留とジェットが座つていてるのが見えた。一緒に仲良くお茶を飲んでいる。

俺は黙つて秋留の隣に腰を下ろす。

「おはよう、ブレイブ。体調はどう?」

早速、秋留から優しく語りかけられて一気に元気が出ってきた。

「絶好調！」

俺はガツツポーズで答える。秋留が「フフフ」と可愛く笑つた。

「何とか嵐は越えたようですよ」

この船の船長が俺達の所へ来て言つた。船長らしい日に焼けた黒い顔にモジヤモジヤの黒いヒゲを生やしている。右足は義足だ。自己紹介された時に聞いた話だと、豪快に転んだ結果義足になつてしまつたらしい。一体、どんな転び方をしたのだろうか。

「後、何日くらいでアステカ大陸に到着しそうですか？」

「まあ、一週間でしょうな」

秋留の質問に船長があつたと答える。そ、そんなに体力持つかな……。

「がつはつは。心配すんな。途中の小さな島で色々補給とかするからな」

俺達の不安げな顔を見て船長が言つ。

それを聞いて俺達は心からホッとした。カリューもさすがに一週間経つたらミイラになつてゐるかもしだれない。

ふと誰が操船をしているのかと後方を見た。舵を握っているのはノニオーラだ。

俺の目線に気づいたのかヒゲモジヤ船長（名前は忘れた）が説明し始める。

「ノニオーラは良い腕を持つてゐるよ。お陰で俺は樂が出来る」  
ガロンは依然としてメインマストの見張り台にいる。船尾にいたラムズはいない。染次郎は相変わらず一度も見かけないが船には乗つてゐる事だらう。

その時、見張り台にいたガロンが大声で叫んだ。

「黒い船が見えるぞー！」

俺達もガロンが見てゐる船首の方向を見つめた。確かに水平線上に黒い帆を張つた黒い船が見える。あまり良い見た目とは言えないが……。

「ありやあ噂の海賊船だぞ！」

ヒゲモジヤ船長が近くの金属の筒に向かつて叫ぶ。この筒は船の至る所と繋がつていて声を伝える事が出来る。

船長がノニオーラの場所に走つた。

俺達も海賊船からの攻撃を警戒して船首へと進む。とりあえず距離が大分あるため、まだ攻撃は仕掛けてこないようだ。

「魔動力を上げろ！ 海賊船から離れるんだ！」

船長が叫ぶ。

ノニオーラは巧みに舵を操り、帆で風を受けて船のスピードを上げているようだ。まだ少し海が荒れてゐるせいで、再び船が大きく

揺れ出す。

「このままだと追いつかれるぞ」見張り台からガロンが言った。いつの間にかラムズも甲板に出てきて帆の向きを操るロープを握っている。  
既に黒い海賊船は誰の眼にも確認出来る程近づいていた。  
しかも先程は一隻しか見えていなかつたが、海賊船は三隻いた！  
そのうちの一隻の正面に設置されている大砲が少し動いたのに気づいた。

「おい！ 大砲で撃つてくるぞ！」

「分かつて！ ちょっと黙つてろ！」

ノニオーライは俺が忠告する前に既に気づいていたらしく、舵を勢い良く右に操る。

船のすぐ横で海賊船から発射された弾が海面に当たつて水しぶきが上がつた。ノニオーライは海賊船の方を確認しながら舵を操る。

「こちらも大砲の準備だ！ 急げ！」

船長が叫ぶ。

どうやら海賊船の大砲の方が性能が良いやうだ。こちらの大砲ではもう少し海賊船に近づかないと飛距離が足りないらしい。

大砲？

俺は秋留の方を振り向く。俺達パートナーの頭脳であり遠距離攻撃が得意な大砲の存在を忘れていた。

「女性に対して大砲は失礼だけどね！」

秋留が俺の心の中を読み取つて少し怒る。

秋留はそのまま呪文の詠唱を始めた。

「業火の身体を持ち……」

再びすぐ傍で水しぶきが上がつた。それでも秋留の集中力は途切れていよいよだ。

「煉獄の心を抱く者よ、烈火の眼差しを知らぬ哀れな者達を汝の瞳で貫け……」

秋留が呪文の詠唱を終えた瞬間、船が今まで以上に大きく傾いた。

「「ロナレーザー！」

身体のバランスを崩しながらも秋留は呪文を放つた。いつもは命中力の良い秋留だがさすがに今の揺れでは照準が合わなかつたらしく、迫つてきていた海賊船の帆を貫いただつた。

「むう！ もう少しマシな操船して欲しいもんだよね」

呪文の反動で尻餅をついた秋留が文句を言つ。可愛い御尻をさすりながら起き上がつた。

秋留はノニオーラの方を睨んだが、全然気づいていないようだ。暫くしてこちらの船からも大砲による攻撃が開始された。しかし船の揺れのせいで、なかなか海賊船をとらえることが出来ない。

見かねた船長が途中でノニオーラと操船を交わつたが、既に海賊船は俺達の攻撃の射程外へと離れていた。

「す、すみません……。野蛮な海賊船と戦うのに慣れてなくて……」

ノニオーラは汗をかきながらヒゲモジヤ船長に謝つてゐる。

あいつは見た目ばかりで実践経験はほとんどないに違いない。

「いやいや、一発も攻撃を食らわなかつたのは凄い技術だぞ！」

船長が豪快に笑う。

とりあえず俺達は海賊船の攻撃を退けたのだ。

「ざざざ～……」

すっかり海も穏やかになつたが空にはまだ暗雲が広がつてゐる。それでも辺りは少し明るくなつた。

隣ではカリューが久しぶりの外の新鮮な空気を吸つてゐる。顔はまだまだ青い。

「船は嫌いだ」

カリューは最低限の言葉で今の気持ちを伝えた。あの海の荒れ方ではカリューじゃなくても船を嫌いになりそうだ。

少し離れた所にカモメの群れが飛んでゐる。確かカモメの群れがいる所には魚がいると聞いたことがあるぞ。

水しぶきを上げてカモメの群れの下から巨大な影が飛び出た。モンスターか？

「いやあ、大漁！ 大漁！」

片手にモリを持つた魚人……いや、ラムズが海の中から現れた。モリには魚が四匹突き刺さつている。安全とは言えない海で、何をやっているんだか……。

そのラムズが船の縄梯子を上つて来た。後ろからは亀のモンスターがついて来ている。

「お！ カリューさんでしたっけ？ 体調はもう大丈夫ですか？」船員から手渡されたタオルで頭や身体を拭きながらカリューに話しかけた。漁師の格好をしていたためあまり気づかなかつたが、ラムズは肉付きの良い身体をしている。やはりあがり症でなければ手強い奴に違ひない。

「元気そうだな……」

ラムズの質問にカリューが答える。その眼は何か羨ましそうだ。「俺は海賊の職業に就いてはいるけど、普段は漁をして生活しているからなあ。海は慣れてるし、あれくらいの時化じゃあビクともしないよ」

拭き終わったタオルを近くの籠に放り込む。

「元気の出る魚料理を作つてやるよ」

そう言つとラムズは船室に下りていった。

「羨ましいですね」

ジエットがポツリと言つ。俺達は無言で頷いた。

暫くは何事もなく航海が進んだ。天氣も次第に良くなつて來ていた。

時折、魚型のモンスターや鳥型のモンスターが襲つてきたが、難なく撃退していった。ガロンは手に持つていた銃でモンスターを何匹か撃ち落す。どうやらあの銃はショットガンのようだ。一度に何発もの弾を発射する事が出来るタイプの銃だが、細かな標的は狙えないし飛距離もない。近距離向きだな。

一方、ノニオーラは器用にナイフでモンスターを倒している。その腕は正に百発百中だ。身体中に何本のナイフを装備しているのか疑問にもなるが……。

「あいつらも結構やるよね」

近づいてきていたモンスターを魔法で丸焦げにしてから秋留が言った。「も」と言うところが秋留らしい。

少し離れた所では少しフラつきながらもカリューが業火の剣で敵を切り倒していく。

俺も適当に硬貨を節約しつつ、近づいてきたモンスターだけを倒す。

「それにしても……」

ジエットが空飛ぶ魚を三枚におろして言つ。海のモンスターには詳しくないため名前は全然分からない。

「モンスターが少し増えてきましたなあ」

次々と襲い掛かってくる魚だか鳥だか分からぬモンスターを切り刻む。

確かにモンスターが増えている。

「時化の後は餌を求めて獣が凶暴になるだよ~」

後方のマストの影に隠れてサーベルを振り回している船員その一が言つた。

お前は誰だ。

俺は変な喋り方の船員は放つておく事にした。

そうして時折襲つてくるモンスターを倒していくうちに、何日かが経過した。

港を出てから一週間くらいは経つたのだろうか？

今はすっかり日が落ち、甲板の上では松明が光っている。

俺達は食堂に降りて夕食を取つていた。働いている船員もいるので夕食を取る時間はバラバラだが、俺達は船での仕事はないため一緒に食事を取つている。

「今日は港を出て何日目だ?」

ほとんどの時間、ベッドで死んでいるカリューがスープを飲み干して聞く。

「五日目だよ」

秋留が答える。そうか、まだ五日しか経っていないのか……。先はまだまだ長そうだ。

「魚介類を食べ続けてどれくらい経ったんだろうな……」

カリューが遠い眼をする。

港町ヤードで足止めを食っていたのを含めて一ヶ月は経過している。しかしカリューの問には答えない。手負いの狼と会話するのは危険だ。

「後どれくらいでアステカ大陸に着くのかなあ……」

以前、船長の聞いた時は一週間くらいで着くと言っていた。後一週間以上はあるだろう。まあ、途中で補給のために島に立ち寄るみたいな事を言つていたが……。

「はあーあ

カリューが深いため息をつく。

辛いのはお前だけじゃないぞ、と声を大にして言いたいが、さすがにカリューの不幸さを考えると文句は言いづらい。

俺達は食事を終えると船室に戻った。今日も疲れた……。

暫くベッドに横になつてウトウトしていると突然大きな揺れが船全体を襲つた。

「何じや?」

ジョットが飛び起きる。続いて秋留も眼を擦りながら杖を握つた。

カリューは起きない。

俺達三人は甲板に駆け上がつた。

いつもは夜は襲われなかつたのに、今日に限つて何が起きたのだ

る……。

俺達は甲板に飛び出した。至る所で船員達が倒れている。

「遅えなあ!」

ノニオーライが甲板の少し高い位置から叫ぶ。

その隣にガロンとラムズが武器を構えて暗闇を睨んでいる。

「もつと灯りいる?」

秋留の叫びにノニオーライが頷いた。

「光の精霊レムよ、我が前にその姿を現し、全ての影を滅せよ……

ブライトネス!」

秋留の杖から小さな光の玉が飛び出したかと思つと、上空で大きく輝く。

目の前には……真っ赤で巨大なタコが姿を現した。タコール……とうとうそんな姿に……。

「ブレイブ! 変な事考えてないで戦闘だよ!」

気づくと俺以外のメンバーは姿があらわになつたタコ田掛けて攻撃を開始しようとしていた。俺もネカーとネマーを構えて目の前のタコ田掛けて走り出そうとする。

その時、海の中から川にかかる橋のように太いタコの足が飛び出してきた。その足が走り出した俺達を難なくかわす。それなりにレベルの高い俺達はその攻撃を難なくかわす。

「バキッ」

しかし、俺達への攻撃を外れたタコ足が船の甲板を破壊した。

「避けるな! 足を一本ずつ減らすんだ!」

遠くで舵を握り始めたノニオーライが無茶な事を言う。その隣では船長が銃を片手にタコ足に応戦している。

巨大なタコに船 자체を捕まえられているが、ノニオーライは何とか体勢を立て直そうとしているようだ。

「南から強めの風が吹いてるぞ! 帆を全開に張れ!」

ノニオーライがまだ意識のある船員達に叫ぶ。

「お前らは足だ! まずは足を狙え!」

ノニオーライの命令というところが気に食わないが、俺達は船にガツシリと吸盤で張り付いているタコ足に攻撃を開始した。

走りながら俺はネカーとネマーを構えた。ジェットと秋留はそれ

ぞれ別のタコ足へ向かっている。あくまでタコだから、足は八本だらうか。

目の前に海から飛び出したタコ足が見える。

俺は連續でトリガを引く。

「おわッ！」

ネカーとネマーから発射された硬貨が弾力のあるタコ足に弾かれて俺の方へ襲ってきた。

俺は間一髪で自爆を避けた。さすがに自爆は情けない。

「ファイヤーバレット！」

後方で秋留の叫び声が聞こえてきた。

この豊かな弾力でも秋留の炎の魔法の前には無力だらう。秋留の攻撃により香ばしい良い匂いがしてきた。

「ぐ〜〜〜

思わず腹が鳴ってしまった。魚介類は食い飽きるほど食べたはずなのに……。

「へつ」

俺の耳にはノニオーライの憎たらしい笑い声が聞こえてきた。

あいつも海賊なら俺の腹の音が聞こえていてもおかしくはない。いつか見返してやるぞ……。

「うつ！」

周りに気を取られているうちに、いつの間にかタコ足の一撃を食らってしまった。一瞬息が止まる。

俺は背負っている鞄に手を突っ込んだ。

鞄の中身は戦いやすいように綺麗に詰め込まれている。俺は手探りで必要なアイテムを取り出すとネカーの銃身に取り出したアイテムを擦りつけた。

俺が取り出したアイテムは小さな爆弾だ。俺はタコ足に向かって爆弾を投げつける。

一瞬の間の後、巨大な爆発が発生した。

その衝撃でタコ足も驚いて船から少し遠ざかる。

「てめえ！ 少しは使用する道具を考えやがれ！」

爆発の衝撃で大きく揺れる船を器用に持ち直してノニオーライが叫ぶ。

確かに予想以上の威力だ。

忘れていたが、この爆弾は以前どこぞのオヤジから購入した、見た目はショボイが威力は絶大の爆弾だった。

少し離れたタコに対してもすかさず船から大砲が発射される。

ノニオーライの操船によつて照準がつけやすくなつてゐるようだ。出来るなら初めからやれよ、と心の中で思う。

大砲の爆発によつてタコの頭からは真っ黒な墨のような血のようなものが飛び出す。

タコは赤い顔を更に赤くして反撃しようとしている。

その時、いつの間に上つたのかタコの頭の人影が見えた。

「染次郎！」

今までどこにいたのか染次郎がタコの頭の上に姿を現した。

染次郎は持つていた刀をタコの頭に突き立てる。あのヌルヌルして弾力のある皮膚の上に立ち刀を突き立てるとは、やはり染次郎は実力は並じやない。

しかし深く刺さつてはいるが、染次郎の刀はタコの分厚い皮膚を少し傷つけただけのようだ。

「はつ！」

染次郎は気合を發し、手に持つていた鉄球を天高く投げつけた。その鉄球は鎖で先程の刀とつながつてゐる。

空を覆う黒い雲から鉄球に向かつて轟音と共に一筋の雷が落ちた。雷から発生した電撃が鎖を伝わりタコの身体を襲う。

「ぎょわあああんつ」

タコが不気味な呻き声をあげた。

まだ残っている三本のタコ足で頭上の染次郎を払い落とそうとする。

しかし染次郎は既に頭の上にはいない。モンスター」ときの素早

さでは染次郎の動きを捉えることは不可能だろ。」

「染次郎もいることだし、私はちょっとイザベラさんの様子を見てくるよ」

秋留は俺とジェットを残し船室へと消えていった。

俺も秋留と一緒に行こうとしたところをジェットに呼び止められる。

「頑張りますぞ！ ブレイブ殿」

ジェットはレイピアを構える。

ジェットの装備しているレイピアは魔力を込める事が出来る特別製だ。実は秋留から貰つたものだ。先程もジェットはマジックレイピアに魔力を込めてタコ足の一本を吹っ飛ばしていた。

色々ダメージを受けたタコが激しく暴れ始める。

ノニオーライが巧みな操船技術でタコの攻撃をかわすが、何度も攻撃を受けて船が大きく揺れた。

ガロンがショットガンを構えてタコ足の前に躍り出る。

ショットガンが火を噴きタコ足が吹っ飛び。残り一本。いつか前に生命の危機を感じたのかタコが船から離れ一度海中に潜る。しばしの静寂。

「ドンッ」

船が突然縦に揺れた。どうやらタコ頭で船底を叩いているようだ。脳みそがない訳ではないらしい。

「何とかならないのか？」

俺は揺れる船から振り落とされないように手すりにしがみつく。

ノニオーライが鉄の筒に向かつて叫ぶ。

「ラムズ！ 船底砲の準備は良いか？」

「準備完了。照準もバッチリだ！」

筒の中からくぐもつたラムズの声が聞こえた。船底砲？

「発射！」

ノニオーライの号令の後、船全体が大きく揺れた。海が一瞬荒れる。

「大型の船になると、海中の敵用に船底に特別な大砲を持つてるの

もあるんだよ」

無知な俺に対しても二オーライが勝ち誇ったように言つ。

「それより、そろそろタコ野郎が飛び出してくるぞー！」

「火力は任せろ！」

俺は鞄から再び小型の爆弾を取り出すと、海面を睨みつつ構えた。隣ではジェットもマジックレイピアに魔力を込めつつ構える。

水しづきが大量に巻き上がり、勢い良くタコが飛び出した。視界が一瞬塞がる。

俺は水しづきの隙間から注意深くタコを観察した。

頭には血管が浮かび、更に赤みを帯びている。まだ爆弾を投げる事は出来ない！

「ぶしやあああ

巨大タコの突き出た口から真っ黒な墨が飛び散った。これが有名なタコ墨か！

俺は慎重にタコ墨の飛沫を避ける。

ちなみに墨の量も身体に合わせて大量なため、飛沫といつても一人分位の大きさはある。

「のわあ！」

素早さのあまりないジェットがモロに飛沫を浴び、その身体が真っ黒になった。

俺はタコの正面に向かい走り出した。タコの口目掛けて爆弾を投げつけるためだ。

左方からはガロンがショットガンを構えて飛び出す。負けてたまるか！

タコの左目が突然燃え上がる。その傍には染次郎の姿が一瞬見えた。何か技を繰り出したに違いないが、あまりしつかりは見えなかつた。

続いて右目に向かつてガロンが至近距離でショットガンをぶつ放す。

タコは両目を失い、再び墨を吐こうとしているのか息を大きく吸

い込む。

俺はその動作に合わせて爆弾を投げつけた。

爆弾を飲み込んだタコの動きが一瞬止まる。

「ポンッ」とまるで遠くで爆発音がした様な小さな音。

しかし、その音と共にタコの身体が一瞬二倍位に膨らんだ。

沈黙。

そのまま巨大なタコモンスターは倒れ海を漂う漂流物と化した。こいつの死体がどこかの大陸に流れ着いたりしたら、さぞかし大事になることだろう。

「ブレイブ殿へ、どこですか〜」

ジーットの助けを求める声と、何かが海に落ちる音が聞こえたのはほぼ同時だつた。

真っ黒な身体を綺麗にしたかったんだろう……。

「ぶえっくしょい！」

優しそうな見た目とは裏腹にジェットが鬼のようなクシャミをする。

これでまたもに戦えるパーティーメンバーは、俺と秋留だけになってしまったという事か。

ここには船の医務室だ。目の前には見た目が海賊と全く変わらない船医がいる。顔中がヒゲで覆われているように見える。

「ううう……」

巨大タコとの戦闘で船が何度も揺れ、再び激しい船酔いに襲われたカリューが顔を青くして唸つた。

「風邪と船酔いだな。薬渡すからとりあえず飲んどけ」

思いやりの欠片も見せない船医が、棚から適当な薬を取り出してジェットとカリューに渡す。

俺達は医務室を出ると、自分達の寝床に戻ってきた。

「ゾンビも風邪を引くんだな」

俺はボソッと呟いた。

俺はジェットと出会うまではゾンビという種族について全く理解していたが、まるで生身の人間のように食事をして睡眠を取る。そしてこうして病気にもかかる……。

もしかしたら、ジェットが特別なかも知れない。いや、特別なのはジェットを死人として復活させた秋留の方なのかも知れない。

そのジェットは氷枕に頭を乗つけて眠っている。

つていうか、熱とかあんのか？

「何となく、早く治りそつじやん？」

俺の心を読んで秋留が言った。

そういうえば、俺は心が読まれやすいのだろうか。自分では全く自覚はない。

「顔に出やすいんだよね、ブレイブは」

またしても俺の心を読んだ秋留が言つ。最早、言葉がいらなくなつてある。

こんなに簡単に顔に出てしまつては、盗賊という職業を少し考え直さないといけないか……。

「また少し荒れだしたかな？」

秋留が小さな窓から外を眺めながら言つた。確かに船の揺れが激しくなってきたようだ。

ベッドで寝ている船揺れ探知機も苦しんでいる。

「風邪とかうつりそうだし、居心地悪いからまた甲板に出ないか？」

秋留が周りを見渡して頷く。

「確かにちょっと危険なウイルスとか混ざってるかも」

秋留がジエットを見てから足早に船室の扉を開けた。

いい加減、波の音も聞き飽きた。はじめは波の音は落ち着いて良い感じだと思つていた自分が憎い。

「どんな感じですか？」

近づいてきた船長に秋留が聞く。

船長がここに歩いてくるとこう事は、今船を操つてているのはノーノーイという事だろ？。

「船の損傷が少し激しくてなあ……直しつつ進んでいるが、なにぶん負傷した船員も多くて……」

少し疲れ気味に船長が答える。

巨大タコの襲撃は想像以上に船全体にダメージを与えたようだ。

今思えば、我らがパーティの半分は巨大タコの襲撃とは関係のないところで痛手を負つてているように思えて情けない。

「何か手伝える事があるなら協力しますよ」

秋留が余計な事を言う。

まあ、今の船の状況を考える限り冒険者の俺達がノンビリしてい  
る訳にもいかないだろう。

そろそろ食料が少なくなってきたという事を聞いて、俺達は一人  
で釣りをする事になった。俺達に出来るのはそれくらいなのだろう。

「釣れないね」

釣りを始めて三分後に秋留が言つ。さすがにそんなに早くは釣れ  
ないんじゃないかな、と言おうとした矢先、秋留の竿が大きくしな  
る。

「おお！ 早速来たあああ！」

秋留が勢い良く竿を引く。その先には人間の子供程の大きさもあ  
る虹色の魚が引っかかっている。

「お！ レインボーフィッシュじゃないか。珍しい魚で背びれが特  
に高いんだよ」

近くで作業をしていた船員が網を操り、針に掛かった魚を器用に  
捕獲しながら言った。

それを聞いて秋留も自慢そうに連れた魚を見た。しかし魚自体に  
は触れないようだ。船員が網の中で暴れる魚を近くの生簀に放り込  
んだ。

「さうって、続きだ続きだ」

嬉しそうに秋留は再び釣りを始める。

あ～、何か秋留とデートしてるみたいで幸せだ～。

それから暫く釣りを続けていたが俺は全く釣れず。秋留はあの後、  
十六匹もの魚を釣り上げた。

「そろそろ引き上げようか？」

秋留が伸びをしながら言った。

その時、今まで沈黙を保っていた俺の釣竿が大きくしなった。今  
にも折れそうだ。

「うおおおお！」

俺は思いっきり竿を引く。海面へと流れている糸が左へ右へと大  
きく振られた。

「プレイブ！ 頑張れ！」

十分な釣果を上げた秋留が隣で応援してくれる。ここで男を見せる時が来たようだ。

俺は盗賊の能力を最大限に生かし全身で海中の魚の動きを捉えようとした。

糸の振動が身体全体に伝わってくる。

ここだ！

俺は思いっきり竿を引っ張つた。手こじたえは十分だ。

ざぱぱ～～～……。

俺の釣糸の先には巨大なタコの口が引っかかっていた。その両目は潰れている。

俺は先日倒したあの巨大タコの死骸を釣り上げてしまったようだ。隣では秋留が大笑いしている……。

『ふふっ』

俺の耳にはノーオーイ達が遠くで笑っている声も聞こえた。

「まあ食えるんじゃないのか？」

レインボーフィッシュの事を教えてくれた船員が言った。数少ない船員達は巨大タコモンスターの死骸をタコの大きさに負けない程の大きな網で引き上げる。

夕食はタコづくしになるのだろうか。

「いつただつきま～す」

その日の夕食。

俺達のテーブルの上には今まで以上に海の幸が並んでいる。

特に秋留が釣り上げたレインボーフィッシュの背びれの煮付けの味は格別だった。口の中でとろける感触がたまらない。

「今日はやたらとタコ料理が多いなあ」

カリューがタコ焼きを口に頬張りながら愚痴る。熱そうにハフハ

つしている。

「身がプリプリしていて美味しいですね」  
ジェットがタコのマリネに舌鼓を打つ。

カリューもジェットも今食べているタコ料理が巨大タコモンスターだという事実は知らない。

俺もタコ飯を食べた。意外に美味しい。

「後どれくらいで島に着くんだろうな」

カリューの頭に血管がピクピクしているのが見える。そもそも限界に違いない。

「後二、三日ってところらしいよ」

俺達の後ろから、久しぶりのイザベラ軍団が登場する。  
さすがに全員、顔色はあまり良くない。

その中でイザベラが抱いている子供は顔色も良くスヤスヤと寝息を立てていた。

「後少しの辛抱だ。頑張れよ」

クログローがぶつきらぼつに答える。やはりあまり好きになれない。

そのクログローは左腕を怪我したらしく白い布で腕を吊っている。俺の視線に気付いたのかクログローは恥ずかしそうに言った。

「大きく船が揺れた時に倒れちまつてな……情けない……」

いつもならここぞとばかりに嫌味を言つてやるのだが、情けなさで言つたら俺達のパーティーも負けていたため、つっこまない事にした。

「色々頑張つてもらつているみたいで感謝するわ

イザベラ達のテーブルにも料理が運ばれてきた。タコづくしに少し顔が引きつったように見える。

「リュウ君も静かに寝ていいみたいですね」

俺には見せない笑顔で秋留がリュウに語りかけた。思わず嫉妬した眼でリュウを睨んだ自分を戒める。

「何やってんだ?」

自分の頭をポカポカ殴つているとカリューに止められた。目の前では秋留が俺のやつっていた事を理解していたかのように白い眼で見つめている。

「はあ～……」

秋留がため息をつく。いや、ため息つかると少し傷つくぞ……。

俺達はイザベラ達と適当に話しをすると、一日を終えるため自分達の部屋へと帰った。

「じゃ、俺は寝る……」

最近めつきり体力の無くなつたカリューがベッドに倒れこむ。「へ～っくしょい！」

ジエットも鼻をかみながらベッドに横になつた。

その額に秋留が濡れタオルを乗せる。俺も病気になつたら秋留に看病してもらえるのだろうか。

「すまんのあ……」

ジエットが秋留に言つ。

この光景を見ていると、昔の物語にあるよつな「金がないなら娘は貰つていくぜ～げつへつへ～」という展開を想像せずにはいられない。

「はあ～」

俺と秋留は暫くお互いのベッドに横になつていたが、秋留のため息がまたしても聞こえた。俺、何かしたか？「げつへつへ～」とか考えていたのがバレたか？

「どうした？」

他の死んでる奴らを起こさないように小声でさりげなく聞いた。「今、戦闘になつたら少し危ないかもね」

秋留も小声で答える。

確かに秋留の言つ通りだ。俺達だけではなく負傷している船員達も多い。唯一無事なのはノニオーラーイ達のパーティーだけだ。

次に巨大生物に襲われたらどうなつてしまつんだろうか。以前襲つてきた海賊もあれで諦めたとは思えない。やつらにとつてみれば、

久しぶりの獲物のはずだから……。

「海賊だ！」

考え事をしているうちにいつの間にか寝ていたようだ。突然の声に向かいのベッドで寝ていた秋留も眼を覚ます。

一階で寝ているジエットとカリューも調子の悪そうな呻き声を上げながら起き上がったようだ。

俺達は素早く装備を整えると、船室を出て甲板へと走った。体調

の良くないカリューとジエットはフラフラと遅れてやって来る。

「この前のやつらか？」

俺は甲板で望遠鏡を覗いている船長に向かつて聞いた。船長は静かに頷く。

「前回と比べると状況が悪すぎる。傷ついた船員も多いが、船へのダメージが大きくてスピードが出ない……」

船長の歯軋りが聞こえてくるようだ。

俺は舵を取つているノニオーラの方を振り向いた。奴も真剣に舵を握っている。残念ながら船での攻防は奴に任せることはない。

しかしノニオーラの操船もむなしく、三隻の海賊船は俺達の船を囲うように展開していっている。

秋留の魔法やこちらからの大砲を警戒してか距離をあけながら……。奴らも馬鹿ではないようだ。

「何かないのか？ 一時的に爆発的なスピードが出たり空を飛んだり出来るような仕組みとか……」

俺の台詞にノニオーラが俺の方を見もせずに「へつ」と笑った。くやしい。しかし、そんな仕組みはないという事も解っていた。

少し離れた場所から巨大な鳥類の羽ばたきが聞こえてくる。恐らく他の奴らには聞こえていないに違いない。

俺は周りを見渡した。

俺達の船の右後方に展開していた黒船に、人間一人程の高さがあ

る鳥類が羽ばたいているのが見える。

「秋留、見えるか？」

俺の視線を追つて、秋留も右後方の船を見つめる。その顔が少し引きつった。

「スペルワイバーン……」

秋留が震えた声で呟く。スペルワイバーンというモンスターは聞いたことも無いが秋留の反応を見ると厄介な相手だということが分かる。

「黒魔法を唱える事が出来る竜型のモンスターじゃな……」

もともと白い顔が風邪で青くなつたジエットが死にそうな声で言う。いや死んでるんだけど……。ジエットは生前は大陸各地を回り魔族やモンスターと戦つていたため、俺達が知らない事を知つていたりする事が多い。

「とりあえず近づいてくるぞ！ 魔法で迎撃出来ないのか？」

俺はネカーとネマーを構えながら秋留に言った。

秋留が残念無念そうに首を横に振る。

「あいつに魔法は効かないの……それでいて黒魔法を唱えてくるっていうムカツクモンスターだよ」

秋留の顔色が変わつた理由が分かつた。

そもそも一般的に魔法の効かないモンスターは魔法を唱えてくる奴はない。

つまり物理攻撃が有効だつたりするのだが……。魔法を唱えてくるとなると物理攻撃を仕掛けるために突つ込む訳にもいかない。

そのスペルワイバーンの口が大きく膨らんだ。何か吐いてくるに違いない。

秋留は船を守るようにワイバーンの前に立ち、防御呪文を唱え始めた。

「精靈達の楽園を守りし風の門は、何人も通さぬ無敵の防壁  
秋留の詠唱と共に回りに風が巻き起つる。」

「ヴィントヴァント！」

ワイバーンが炎を吐き出したのと秋留が魔法を唱えたのはほぼ同時だつた。

秋留が唱えた魔法により船の後方に大きく風の壁が作られたのが見える。

その風の壁にワイバーンの吐き出した炎の玉が弾き飛ばされた。  
「きやあっ！」

秋留が甲板の中央まで吹き飛んだ。その衝撃を背中の生きたマント、ブладーが吸收する。しかし秋留の身に着けていた新縁の鎧が大きく切り裂かれていた。

どうやらワイバーンは炎の玉を吐きながら突っ込んできたらしい。そのワイバーンが俺達の後ろにあつたメインマストを切り裂いて後方へと飛んでいった。

「すぐに修理しろ！ 海賊船に追いつかれるぞ！」

船長が船員達に指示する。

しかし作業を行える船員達の数が圧倒的に少なすぎる。

その時、今度は左後方の海賊船から海の中を凄い勢いで近づいてくる何かの存在に、俺は気付いた。

鞄に手を突っ込んで、頼りになる小型爆弾を着水しない様に調整して相手に投げつける。

派手な爆発が海面すれすれで起こると同時に大量の水しぶきが上がった。やつたか？

だが海中から人間を丸呑みする事が出来そうな巨大な魚が姿を現した。その右半分位にダメージを負っている。

巨大な魚の眼が俺を睨みつけた。

俺は危険を察知して素早く左回転をして木箱に隠れる。俺がいた場所の甲板が吹き飛んだ。

奴の口から凄い勢いで発射された水の弾丸の威力だ。

船の前方で炎が上がつた。どうやらワイバーンが暴れているらしい。カリュードジェットの病人ペアがフラフラしながらも船の先端に向かう。

メインマストの柱の後ろには、秋留がダメージを受けた肩の辺りに手を当てて様子を窺っている。

「奴ら、奇襲には慣れているみたいだね」

秋留が息を整えつつ言つ。まあ奇襲と言えば海賊の十八番と言つてもいいかもしない。

頭上に不気味な音を聞いた俺は咄嗟にネマーとネマーを連射する。真ん中の海賊船からぶつ放された大砲が俺達の頭上で派手に爆発した。

「危ねえじゃねえか！ 馬鹿野郎！」

舵を握っていたノニオーライが叫ぶ。確かに今の攻撃は当たつたら致命的なダメージを受けていたかもしれない。しかし叫んでも相手は手を緩めてくれるわけじゃないぞ。

「そろそろ魔法が届くかな……」

秋留は俺に言いながら再び船の後方に立つ。俺も秋留をサポートするために一緒に後方へと向かう。左手にはネマー、右手には小型爆弾を持っている。ちなみに今までお世話になつた小型爆弾はコレで最後だ。

「業火の身体を持ち 煉獄の心を抱く者よ」

秋留の呪文の詠唱に気づいたのか、海中から魚モンスターが突然現れた。俺は左手のネマーを連射する。

俺達と同じくらいの目線までジャンプした魚モンスターは、発射した硬貨の弾丸を器用に身体をひねつてかわした。

魚モンスターの身体が縦になる。そのせいで的が小さくなつた。魚モンスターもそれを狙つていたらしく、今にも口から水の弾丸が発射されそうだ。

「残念！」

俺の腕をそこら辺にいる狙撃手と一緒にしないでくれ、という気持ちを込めて言った。

俺は慎重にネマーを連射した。

全弾命中して魚の頭部が木つ端微塵に吹き飛んだ。

「烈火の眼差しを知らぬ哀れな者達を汝の瞳で貫け」

目の前でモンスターの頭部が吹き飛ぶというショックングなシーンを見ても、秋留は動搖一つしない。そこが一般的の女性と秋留とう女神の違いかもしない。

「コロナレーザー！」

秋留が両手で持つ杖から、真っ赤な光線が後方正面の海賊船にぶち当たる。俺の耳には慌てる悪海賊達の心地よい声が聞こえてきた。あつという間に魔法を食らった船が燃え上がつた。まずは一隻撃破か。

その様子を見たはずの他の二隻の海賊船は怯まない。普通仲間の船が一撃で破壊されたら少しくらいビビッても良いはずだが。

「ぎゃおおおん！」

前方で暴れていたはずのワイバーンが俺達の頭上を通り過ぎた。その勢い良く上空を飛び回るワイバーンの背中には何とカリューがしがみついている。

「あいつ、乗り物に弱いくせに無茶するなあ」

俺は言ったが、改めてカリューの凄まじさに驚いた。

カリューはワイバーンの背中に剣を突き刺したまま、その手を離さずにワイバーンに乗っているのだ。

怯むことなく両手で持つ剣に力を込めている。

カリューの持つ剣の魔力の影響でワイバーンの身体が燃え始めた。

カリューは雄叫びと共に剣に一層に力を込めた。

「ワオオオオン！」

ワイバーンが悲痛な叫び声を上げる。カリューの剣がワイバーンの身体を貫いた。

ワイバーンは断末魔の叫びと共に海へ墜落した。  
背中に乗るカリューと共に……。

海中に消える瞬間、カリューの「しまった！」という顔を見た気がした。あいつやっぱリアホだな。後のこと何も考えてない。これまでまた風邪患者が増える事になりそうだ。

「さて、あと一隻いるけど……」

秋留は何事も無かつたかのように話を続けた。モンスターも倒し終わつたジェットが隣に来た。若干焦げている。

「あつちも近づくと私の魔法食らうかもしないし、こつちは逃げ切りたい……」

秋留は考えながら言った。

「という事は切り札を使う時が来たみたいだね」

切り札？ 秋留はこういう状況を予想して切り札を用意していたのだろうか。

「切り札？ それは一体何だ？」

真後ろからショットガンを構えたガロンが姿を現した。その銃口が俺達に向けられている気がする。

「え？ あんた達が切り札を隠し持つてるんじゃないかなあ」と思つてね」

秋留が慌てて言った。

ガロンのタバコをくわえた口がニヤリと笑う。

「ああ、あるぜ……切り札……」

そう言い残すとガロンは船の後方に向かって歩いていった。海賊船二隻を見渡す。

「大砲なんかぶつ放すから沈没するはめになるんだぜ……」

ぶつとタバコを海に吐き出し、ガロンは新しいタバコに火をつけた。

「お前ら結構やるよな」

次はラムズが船の前方から歩いてきた。その肩にはタトールが乗つかつていて。

「大砲は浸水が酷くて全部使い物にならなくなつていたぞ」  
ラムズは衝撃的な告白をする。

いよいよ海賊船との対決が不利になつていつているようだ。

そういうえば後は出現率が低い染次郎が揃うとノーオーライパーティが集合することになるな。

「いたつ！ 押さないでよ！」

船室へと続く階段の方からイザベラの声が聞こえてきた。甲板に上って来たイザベラの背中には刀が突きつけられている。

俺は咄嗟にネカーとネマーを構えた。

「動かない事だな」

いつの間にか近くにノニオーライが近づいてきていた。こいつらは盗賊と一緒に気配を消すのが上手い。俺は今後、盗賊や海賊と仕事をするのは止めようと思った。

それにしてもノニオーライが言つた「動くな」とはどういう意味だったのだろうか。

俺は船室へと続く階段に視線を戻した。イザベラの背中に刀を当てるているのは染次郎だ。

「どういうつもりっ？」

俺が叫び切る前に背中を何者かに殴られる。一瞬息が止まった。

「うるせえぞ！」

ノニオーライの邪悪な声が聞こえた……邪悪？

俺の後ろにいるのは、今や邪悪な雰囲気を全身から発しているノニオーライだ。

何だ？

何がどうなつたんだ？

氣付くとイザベラ達三人が染次郎に連れられて俺達の隣までやって来ていた。

「大丈夫ですか？」

イザベラの旦那であるリーに起こされた。

俺は状況を把握しようと周りを見渡す。いつの間にかまともに立つてているのは俺達だけになっていた。船員達は至る所で倒されており、船長までもが甲板の端で伸びている。先程のモンスターとの戦鬪で全員倒されてしまったのだろうか。

「全員、眠つてもらつたよ」

ラムズが俺の視線に気づいて説明してくれた。段々と状況が飲み

込めてきたぞ。

俺は更に視線を彷徨わせ、衝撃を受けた。

染次郎の腕にはイザベラとリーの子供であるリュウが乱暴に抱かれている。状況を理解していないらしく、仕切りに染次郎の髪の毛を掴もうとハシャいでいる。

そういう事か。

さすがに子供を人質に取られたら手も足も出ない。俺達が未熟だつた。「任せて」と豪語していた秋留の方を見ると意外に冷静な顔をしている。秋留の事だから必死に策を考えているに違いない。

誰も舵を操っていない船はただ海上を漂っていた。

一隻の海賊船がもう間近に迫ってきていた。

俺の眼には船に乗っている海賊達の邪悪そうな顔が一つ一つ確認出来た。久しぶりの獲物に心が躍つているようだ。中には秋留の事をイヤラシイ眼つきで見ている海賊もいる。俺は思わずネカーとネマーをぶつ放してしまいそうになつて踏みどどまつた。

「お主等の目的は何かな？」

ジエットが冷静に言った。確かにこのままでは海賊船に追いつかれてしまう。

「あ～あ、ちつたあ、自らの少ない脳みそで考えてみろや！」

今までのノニオーラの口調とは明らかに違う。

ちなみにジエットの頭の中に本当に脳みそがあるのかどうかは疑わしい。とクダラナイ事を考えている場合ではなかつた。

俺は暫く考え、混乱して何も考えられない事に気づき、頭脳の女神である秋留を見る。

「貴方達だったのね。この辺の海域で悪さをしている海賊っていうのは」

秋留は言った。

確かにそうだ。言われてみればその通りかもしれない。俺は少し冷静になって考えてみる事にした。

まず荒波の中をイザベラ達が出航しようとする。

腕の良い海賊を雇うのは当然だろつ。

レベル測定大会で活躍した冒険者をイザベラがスカウトして俺達が雇われた。

そして出航。

何日か後に海賊に一度目の襲撃を受ける。こちらは揺れる船のせいで襲つてくる海賊団を沈める事が出来なかつた。それはノニオーライの操船の悪さだと思つていたが、仮に仲間の船を守るためだとしたら……。

そういうえば巨大なタコモンスターに襲われた時はノニオーライは揺れる船を見事に操作していた。

次々に今までの疑問が解明されていく。  
までよ……。

「それじゃあ、海賊船の三隻のうち一隻が沈められたのはどういう事だ？ お前の操船で的を外せば良かつたんじゃないのか？」

ノニオーライは声だけではなく顔まで別人に変わりつつある事に俺は気づいた。

俺の質問にノニオーライは鬼のような顔で答える。

「後先考えずの大砲をぶつ放したからだ。海賊は頭の悪い奴ばかりで困るよ、全く……」

自分の思い通りに動かなかつたから沈めさせた？

俺は改めてノニオーライの邪悪さを思い知らされた。

「と、そろそろ馬鹿だが力や残忍さは人一倍強い、仲間達の御到着だ……」

ノニオーライが近づいてきた一隻の海賊船の方に向かつて歩く。

それと同時に歓声が巻き起こる。

『ノニオーライ船長、バンザーイ！』

海賊達が一斉に叫ぶ。

ノニオーライは軽く手を上げた。

頭のキレる海賊船長のノニオーライが、餌を求めて陸に上がつてきて獲物を海におびき寄せたんだ。まるで熱帯に生息するワニの様に。

そして雑魚海賊共は集団で襲つてくるピラーーアか。

『ノニオーライ船長！ ノニオーライ船長！』

「ヘソ万歳！ ヘソ万歳！」

一瞬、ノニオーライの顔が悪魔のように豹変した。

ノニオーライは腰に隠し持つていた銃で「ヘソ万歳！」と叫んだ海賊の頭に風穴を開けた。

一瞬にして海賊達が静かになる。

「お前ら、あんまりハシャギ過ぎて大事な事を色々忘れるんじゃねえぞ！」

ノニオーライは銃を腰に戻すと俺達の方に振り返った。

「さて、状況はもう飲み込めたかな？ 俺達がお前らの荷物を頂くまで動くなよ……」

ノニオーライはそう言いながらサー・ベルをスラリと抜き、染次郎が抱いていたリュウの頬に刃を当てる。

リュウの眼が点になる。

「リュウ！」

イザベラが叫んで走り出そうとする。その手をリーが掴んだ。

「待つんだ！ 今行つたらリュウが余計に危なくなるだけだ！」

普段は大人しそうなリーが眼を見開き叫んだ。その眼は力強い。

「そうそう、動くなよ」

ノニオーライがサー・ベルを構えたまま歩く。そのまま甲板の端にあるベンチに腰をかけた。

「この船は商人の船だ！ お宝が沢山あるだろうから、遠慮せずに奪い尽くせ！」

ノニオーライの叫び声と共に海賊達が雄叫びを擧げる。今、正に俺達の船に乗り込もうとした時……何と秋留がトコトコと雪崩れ込もうとする海賊達の目の前に躍り出た。

秋留の予想外の行動にその場にいる全員の行動が固まる。

「あんた達、随分罪のない人々を殺めたみたいだね……」

秋留が声のトーンが下がっている。

これは秋留がネクロマンシーを使おうとしている前兆だ。秋留は今は幻想士だが過去に色々な職業に就いた事がある。ネクロマンサーになった経験のお陰で、ジェットもゾンビ稼業を営んでいられる。

「沢山見えるよ、あんた達に恨みを持った人たちの怨念が……」「そう言つと秋留はブツブツと魔法を唱え始めた。

ネクロマンシーの詠唱は何を言つてゐるのかは分からぬ。

「ソウル・ハー・デン・パニック！」

秋留が低い不気味な声で叫ぶ。

辺りの空気が一気に悪くなつたと思つと、今まで見えていなかつた何者かの存在が現れだした。

ある者は苦痛に歪んだ顔をし、ある者はこれから始まる晩餐に歓喜の顔をしている。しかしどの顔もこの世のものではない、まさしく悪靈……。

『ギヤあああああ！』

『つあああああ！』

一隻の海賊船から呻き声が一斉に聞こえ始めた。

その声は肉体的に攻撃をされた時の声ではない。何かが壊れるような不気味な断末魔。

「みんな、私の近くに来て。巻き添えくらひよ」

秋留が言つた。

俺達は無言で秋留に近寄る。さすがに怖い。

「あ、ジェットは大丈夫だよ」

死人のジェットには悪靈は襲つてこないという事か。ある意味同類だしな。ジェットが悲しそうに少し離れた所に立つた。

「ソウル・ハー・デン・パニックつていう術は、近くにいる靈達の想いを強くする効果があるので、彷徨う靈がマイナス方向の想いを持つていれば……こういう結果になるの。ただし制御不可能」

秋留が可愛いけど物凄く怖い事を言つて近づいてきた悪靈を手で払つた。秋留の手に払われて、恐怖に歪んだ顔をした靈は消える。

「「めんね、成仏してね」

秋留が小さい声で呟いたのが聞こえた。

ネクロマンサーは死者を操る魔法。マイナスイメージが多いために俺はあまり好きになれないが、秋留がネクロマンサーの術を使っているなら好きになれそうだ。

「てめえ！」

空気が震える程の声でノニオーライが叫んだ。

右手にはサーベル、左手にはリュウの小さい身体を掴んで掲げている。今にも刺してしまいそうだ。俺は咄嗟にネカーとネマーを構える。

「動くんじゃねえ！」

サーベルがリュウの左頬に軽く刺さる。あいつめ許せない！

それにしてもリュウはあんな状態でも泣き喚いたりしない。そればかりか頬に刺さった傷から血さえ出ない。……えつ？

俺が気づいたタイミングでノニオーライも気づいたようだ。

「な、何だコレは……どうなってるんだ？」

今まで強気だったノニオーライがうろたえた。

そのウロタエっぷりを見て、秋留が小悪魔のような危険な笑みを浮かべながらノニオーライに近づく。ノニオーライ達パーティーのメンバーも呆気に取られていた。

「ところであんた達、ミガワリンって知ってる？」

ノニオーライ達は揃つて素直に首を横に振る。

ノニオーライ達のパーティーの周りでは海賊達が絶叫しながら海に落ちたり、その場に倒れたりしている。その地獄絵図の状況に少しビビッているのかもしれない。

「ちよつとした魔力を込めれば、その人の思ひよう形を変える不思議な水……」

それを聞いたノニオーライは左手に掴んでいたリュウだと思つていた物体を見つめる。リュウだと思っていたソレがニヤリと笑つた。

「そ、そのミガワリンは動く事も出来るのか？」

俺は半ば放心状態のノニオーライに変わつて質問した。

「普通じゃ動かないんだけど、私はちょっと応用して、近くにいた女の子の幽霊を乗り移らせたの」

それもネクロマンサーの力という訳か。

巨大タコと戦闘している時にイザベラ達の場所へ安全確認に行っていたな。その時にちょっとした小細工をした訳か。確かあの時は染次郎も戦闘に加わっていたからな……。神出鬼没の染次郎に見られずに済むタイミングを逃さなかつたという訳か。

俺は心から秋留の戦略家っぷりに感動した。やはり俺達パーティーの頭脳は桁外れだ。

「ちなみにその子もあんた達に恨みを持っていたみたいだよ」

秋留の台詞の直後、ノニオーラの抱えていたリュウの形が崩れた。ただの水に戻つてノニオーラの身体を塗らした。恐怖のためかノニオーラは「ひいつ」と小さな声を上げた。

ノニオーラ達パーティーの周りをミガワリンに宿つていた女の子の幽霊が楽しそうに飛び回る。

暫くノニオーラ達を弄んだあと、満足した様に女の子が秋留の目の前までやつて來た。

「…………ありがとう、おねえちゃん……あたし満足出来たよ……」

女の子の幽霊が秋留に靈、じやなくて礼を言つているのが口の動きで分かつた。

きっと秋留には声 자체も聞こえているに違いないが、ネクロマンサーの力の無い俺達には何を言つているのか聞こえはしない。

「じゃあね。天国でお父さん達と仲良くね」

秋留は女の子に手を振つた。

目の前で女の子の幽霊が幸せそうに姿を消した。

「うがあああ！」

ノニオーラが叫び、両手に構えた大量のナイフを俺達に投げつけた。

俺、秋留、ジェットはイザベラ達の前に立ちはだかり、それぞれの武器や防具でナイフを弾いた。

取り乱しているノニオーラのナイフは威力も命中力も大分下がっている。

「てめえら、許さねえぞ……」

ノニオーラの趣味の悪いサングラスは床に落ちて潰れていた。先程の女の子の幽霊に翻弄された時に慌てて落としたのだろう。

「誰の命でも奪うような奴こそ許せない！」

秋留が叫ぶ。

その意見には勿論賛成だ。

俺とジェットは武器を構えて秋留の両側に並ぶ。

「初めから余計な策は練るんじゃなかつたな……」

ノニオーラが静かに言った。その身体からは黒いオーラが見える気がする。

「お前らも動ける奴は攻撃を仕掛けろ！ 動けない奴は俺が殺してやる！」

ノニオーラは倒れている海賊達に向かつて容赦ない台詞を吐く。放心状態だつた何十人かの海賊達が俺達の周りを取り囲む。状況はあまり良くなつたとは言えないが、人質がいない分思う存分戦う事が出来る。

そういうえば本物のリュウはどこにいったのだろうか。秋留の事だ。安全な場所に隠したに違いない。

海賊一団との戦闘が始まった。その数およそ三十人。

「そうそう……」

ノニオーラが思い出すように言ひた。

「染次郎……」

「はっ」

ノニオーラの呼びかけにすぐ傍にいた染次郎が返事をする。

「お前は消えろ！ 一度も失敗しやがって！」

ノニオーラはそう言つと、染次郎を突き飛ばした。なぜか俺達が後ろめたい気持ちがするのは気のせいだろうか。

染次郎は俺達を一度睨むと、スッと消えた。

暫くの沈黙。

何か後味悪いんですけど。

その沈黙を破るかのように秋留が一步前へと出て杖をかざした。秋留が魔法を唱え始めると、俺とジェットは秋留を援護するために近づいてくる海賊を迎撃する。

俺はネカーとネマーで海賊その一の頭を吹っ飛ばす。俺の容赦のない攻撃に海賊の一部が一瞬立ち止まつた。隣ではジェットが「人を殺すのは嫌いなんでは？」という眼で見ている。

基本的に俺は人殺しはしない。

この世の中、凶暴なのはモンスターや魔族だけではない。同じ人間でも危険な奴は沢山いる。

そいつらとの戦闘を考慮した法律もこの世界には存在する。その法律では、殺されると思った時は構わず迎え撃て、という事が書かれている。詳しいことは知らない。

後日、殺された者の関係者に訴えられた場合は治安維持局により詳しく調査される事になる。

この法律は要するに、悪人を殺しても関係者から訴えられる事はないだろう、という事を前提に作られているのだ。

それでも俺は人殺しはしたくない。

似たような姿形をした魔族を倒すのもあまり気が進まない。こんな性格では冒険者に向かないと言われたこともあるが、俺は今もうして冒険を続けている。

俺が今持っている銃に詰まっている硬貨はいつも千カリム硬貨ではない。一昔前まで使われていた百カリムの石製の硬貨だ。

今は百カリム以下は紙幣になつてゐるため、俺は今まで人との戦闘では苦労していた。千カリム硬貨は銅製のため威力は抜群なのだ。しかしこの石硬貨なら相手は運が良ければ死がない。俺は相手の力量までは氣にするつもりはないから、この石硬貨なら思う存分ぶつ放す事が出来る。

「うがつ」

「うひー！」

俺の的確な射撃で石硬貨が海賊達の脳天に直撃する。その時、背後で「ガチャン」という音を聞いた。俺は慌てて上空に飛ぶ。

足元で床が破裂した。

上空で身体を捻ると、予想通りガロンが銃を構えてニヤけていた。「俺の石の散弾銃を真似しやがったな……」

確かにノニオーライ達のパー・ティーとレベル測定大会が終わった会場で対決した時に、ガロンが石の弾丸を使用していたのをヒントにしていて。その後、港町の骨董品屋を回ってこの石の硬貨を発見したのだ。

俺は着地と同時にネカーとネマーでガロンを撃つ。しかし軌道を読んでいたのかガロンは難なくかわしてショットガンをぶつ放してきた。

「くつ！」

俺は慌てて避ける。

貴重な飛竜の羽で作られているコートの端が吹っ飛ぶ。これ高価なんだぞー！

近距離ではガロンのショットガンには敵わない。俺は後方に飛んで間合いを空けた。

「ひょー！」

俺の真後ろから雑魚海賊が襲いかかってきた。右手のネカーをホルスターに戻し、腰の黒い短剣で雑魚海賊の手首を切る。その動作はまばたきをする時間よりも短い。

「頑張つて止血しないと死ぬぞ！」

俺は更に後方に飛びながら手首から血を噴出している海賊に向かつて言った。

しつこくついて来るガロンが再びショットガンをぶつ放す。近くにいた海賊の陰に隠れて広がる銃弾を避ける。ガロンは俺と違い今日は石の弾など使用していないため、俺が盾にした海賊は叫び声と

共に絶命した。

「てめえみたいな甘い考えの奴に、俺を倒す事は出来ないぞ」  
ガロンが俺を追いかけながら言った。

確かにこんな戦い方では効率は悪いかもしだれないが、ある意味、俺から直接的な攻撃をしない分相手にとつては戦い難いに違いない。俺はガロンや他の海賊の攻撃を避けながら周りの状況を確認する。秋留が避けながら呪文の詠唱をして雑魚海賊達を燃やしていく。耐えられなくなつた海賊達は海へと飛び込む。秋留も人殺しはあまり好きではない。

一方、チエンバー大陸の英雄と言われていた聖騎士のジェットは紳士的な戦闘をしているが、襲つてくる敵は容赦なく切り倒していく。やはり俺や秋留より戦い慣れしているのは確かだ。

今はあの世とこの世の境界線を彷徨ついているかもしれないカリューは、悪人に対する容赦はない。ジェットとは違いすすんで敵に突つ込んで行く。

「俺も混ぜろや」

突然俺の隣にノニオーライが出現した。その拳が俺の左顔面にクリーンヒットする。

俺は痛みを堪えてネマーをぶつ放したが、そこにノニオーライの姿は既にない。次は俺の反対側にノニオーライが出現した。無意識のうちに右手に持つていた短剣を振つた。

「うおっ」

ノニオーライが驚きと共に仰け反る。ノニオーライの着ている真っ白なスースが横に切れた。

「俺の動きについてくるとはな」

そう言うとノニオーライは間合いを取つてナイフを一本投げてきた。既に気分は落ち着いたらしくナイフが的確に飛んでくる。

それをかわしたところベガロンのショットガンが火を噴いた。

「うああっ」

何とか横回転して避けたが散弾の何発かが俺の左足にヒットした。

回転しながら「一トの内側から小さなナイフを取り出してガロンに投げつける。しかし大きめの銃身で防がれた。

「足に食らったようだな。この先避けられるかな？」

ノニオーライがフラツと近づいてきたと思うとサーベルで俺に突きを食らわしてきた。左足にダメージを負つたために体勢を崩して運よくサーベルの突きを避けることが出来た。

その崩した体勢のまま右手の短剣でサーベルを払う。高い金属音と共にノニオーライのサーベルが折れた。

「ほう……」

折れたサーベルを一瞬見た後、ノニオーライは俺の腹を蹴り上げた。

海への落下を防いでいる船の鉄柵に背中を強打する。

ノニオーライの更なる蹴りを身体を捻つて避けた。ノニオーライの蹴りが鉄柵を揺らす。

「ジ・エンドか？」

身体を捻つたところにガロンがショットガンを構えていた。ヤバイ！

俺の目の前で鈍い音と共にガロンの身体が突然宙を舞つた。

「がるるるるる……」

全身をズブ濡れにしたカリューが俺の隣に立つていた。その眼は凶悪そのものだ。睨みつけるだけで弱い奴なら倒せるんじゃないだろうか。

カリューは獣のように四本の手足で床を蹴り、ガロンに追撃を放つ。ガロンは顔面を押さえながらカリューの攻撃をかわす。海から上がつたばかりのカリューの拳はガロンの顔を直撃したようだ。

「んじやあ、一対一と行くか……」

ノニオーライが近くに転がっていた雑魚海賊が握っていたサーベルを拾つた。

左足のダメージが深刻だ。このまま戦闘したら勝てる可能性は低い。俺は素早くネカーとネマーを両手に構えてノニオーライにぶつ放す。先手必勝だ。

しかしノニオーラの姿は見えない。

でも俺は避けられる事を予想していた。ノニオーラのいた空間の方に向かつて素早くダッシュし始める。

俺の後方でノニオーラのサーベルが宙を切り裂いた音が聞こえた。やはり真後ろに移動していたか。後方を確認せずにネカーとネマーレをぶつ放す。

「うおっ！」

ノニオーラが驚きの声を上げた。しかしサーベルで硬貨が弾かれた音が聞こえた。仕留められなかつたか。

俺は止まる事なく、そのまま走り続けた。

眼の端にはイザベラとリーが雑魚海賊達と戦つている姿が映つた。片手で鞭を操るイザベラと体術が半端ではないリーは、とてもじゃないがタダの商人とは言えない。俺達よりレベルが高いのではないだろうか。

「よそ見してると危ない、ぜつ！」

「ぜつ」でノニオーラがナイフを投げつけてくる。俺は気配を察知して左に避けた。

「ちつ、やりにくいや～」

ノニオーラの声に怒りが大分混じつているのが分かる。俺は距離を保ちつつ時々機を狙つて短剣を投げつけたがあまり効果はない。そろそろ大丈夫か。

俺は勢いよく振り向くと同時に黒い短剣でノニオーラに襲い掛かる。

黒い短剣の一撃目でノニオーラのショボいサーベルが再び折れた。この短剣、実は結構な切れ味をしている気がする。

ノニオーラは怯まずに蹴りを繰り出そうとする。俺はそれをノニオーラに突つ込みながら避けて短剣を突き出した。

「ぬうっ！」

ノニオーラが距離を取る。俺は短剣から両手に銃を持ち替えて距離を取つたノニオーラに硬貨を乱射する。

ノニオーラはギリギリのタイミングで硬貨を避けたが、そのうちの三発がそれぞれ左肩、脇腹、右太腿に直撃した。

突然、大量の水と共に俺の身体がノニオーラから更に離れた所に流された。流されながらアチコチに身体をぶつける。

「だ、大丈夫でした？」

ノニオーラの隣にはラムズが寄り添っていた。ラムズの頭の上にはカメのタトールが乗っかっている。

「どうか。」

さつきから横槍が多いと思ったら、ノニオーラは悪海賊団の船長だったか。船長を守るためにやたらと手下が俺を攻撃してくる。今も俺の背後から近づいてきた雑魚海賊を裏拳で殴り倒したところだ。非戦闘員である俺的にはあまりボスとは戦闘したくないのだが……。

「ベチャ、ベチャ……」

その時、海から不気味な音を発して近づいてくる何者かの気配を感じた。

「シーさん、よく来てくれたね」

ラムズが海から上がってきた半魚人に向かって話しかける。その半魚人は全身水色をしており、身体の至る所に大小様々なヒレがついている。それにしてもシーさんは……。

「ラムズだったのね……鳥モンスターや魚モンスターを操っていたのは」

向こう側から秋留が現れた。

どうやら雑魚海賊達は大方片付いたようだ。それより秋留が今言った台詞。つまり三隻の海賊船から襲ってきたモンスター達はラムズが操っていたという事か。

「俺はモンスター使いの素質もあるんだ。悪かったね……」

悪かったね、と言いながらラムズは秋留に向かって攻撃を仕掛ける。あいつもやる時はやる奴らしい、と関心している場合ではない。「貴様の相手は俺だ！」

ノニオーラが真っ白なスーツを脱ぎ捨て叫ぶ。

身体中にナイフがぶら下がっている。あまり動くと自分の身体に刺さりそうなくらいだ。

「お前、逃げながら自分で回復してただろ？」

ノニオーライがシャツのポケットから瓶を取り出して飲み干した。その間に攻撃も出来たが、なぜか身体が動かなかつた。とてつもない恐怖を感じる。

「服の内側から水製の回復薬を足の怪我に流したんだ……。お前も今飲み薬で完全回復か？」

俺は冷静を装つて答えた。

しかしノニオーライから漂つてくる恐怖感だけは消えない。

「回復？ 俺は回復なんかしない。その傷を見て相手への復讐を常に忘れないようにしている……」

アホか。

とんでもなく危険な奴だつたらしい。俺はネカーとネマーを握りなおした。

「今飲んだのはただの酒だ。喉が少し渴いたんでな」  
ノニオーライが再び襲い掛かつてくる。

俺は両銃で迎え撃つたが全て避けられた。ノニオーライの動きが先程までは全然違う。なぜか捕らえられそうに無い。気づいたらノニオーライの蹴りが顔面に迫つてきていた。上体を反らしつつ再び銃をぶつ放したが、今度は後方から背中に蹴りを食らつた。

そのまま踏ん張らずに俺は前転をしつつ後方に銃を構えた。

「はあっ」

真横からのノニオーライの蹴りが俺のネカーとネマーを上空に弾き飛ばした。そのノニオーライの蹴りがそのまま俺の顔面を捉える。ちよつと仲間に助けを求める気持になつてきた。

俺は腰から黒い短剣を取り出し、ノニオーライに攻撃を仕掛ける。その途端にノニオーライは距離を開けてナイフを投げてくる。

無意識のうちに持つていた短剣で全てのナイフを弾き落とす。そこのうちの一本がノニオーライの肩に刺さつた。

「短剣の腕は結構なものようだな。銃はまだまだだ。」

「ノニオーライが失礼な評価をする。

俺は短剣などほとんど使つことは出来ない。今のはたまたまだ。しかし間違つても口には出さない。

ノニオーライは肩に刺さつたナイフを捨てて、腿に下げていた大きめの銃を構える。

「銃の腕は俺の方が上かな？」

ノニオーライは何のモーションも無く銃をぶつ放した。一瞬避けるのが遅かつたら脳みそをぶちまけていたところだ。

俺はノニオーライとの距離を開け、短剣を腰に戻す。

「何だ？ 何かまだ武器があるのか？」

俺は黙つて空中に手をかざす。その手に見事にネカーとネマーが戻ってきた。そしてこっちも負けじと素早さに全神経を注いで銃を乱射した。

その硬貨の弾の一発一発にノニオーライが銃をぶつ放した。石の硬貨はノニオーライの銃から発射された鋼鉄の弾で簡単に弾け飛ぶ。

俺とノニオーライとの距離は十メートル程。その真ん中付近でお互いの銃が発射した弾が攻防を繰り広げている。

「まあまあやるじゃないか」

ノニオーライは言つたが、俺は敗北感を味わつていた。

なぜならノニオーライの銃は弾が五発しか装填出来ないので。一方俺の銃はうまく詰めれば硬貨が二十個は入る。つまり俺との乱撃の間、ノニオーライの方が弾を装填している回数は圧倒的に多いのだ。

それなのにノニオーライとの銃撃に競り勝てない。

動搖のせいかノニオーライのぶつ放した弾が一発、俺の右肩を貫いた。右手に持つていたネカーを落とさないようにホルスターに戻して追撃を転がつて避ける。

右肩に激痛が走つた。

「ボロボロになつてきたね。ブレイブ！」

ノニオーライが意地悪く言つた。俺は右肩を抑えながらノニオーライ

との間合いを取る。ちなみに両手袋には傷薬が塗りつけてあるため、こゝにして肩に当てておけば少しは良くなったりする。

「選手交代と行きますかな?」

俺の後ろから我らがヒーロー、ジェットが登場した。助かつた。「ふつ。お前では俺に触れる事も出来んわつ!」

ノニオーライが素早く動く。

ジェットはその動きを眼で追い、マジックレイピアを振った。

「ざしゅつ」

上空にノニオーライの片腕が飛んだ……いや、あの色白い腕はジェットの腕だ。

「ぬおおおおお!」

ゾンビになつても痛さはある。それが中途半端に人間に近い死人としてのジェットの弱点だ。こゝまで実際の人間に近いのは秋留の魔力の影響だと思う。

そしてノニオーライがサーべルでジェットの首を叩き落した。こいつ容赦がない。明日は我が身か……。

だが驚いたのはノニオーライだった。

首の無くなつたジェットが残つた左腕でレイピアを突き出したのだ。

しかしノニオーライは驚きながらもレイピアを寸前の場所で避ける。さすがとしか言いようがない。ちなみに首が無くなつて声が聞こえないが、ジェットは断末魔の叫び声を挙げていたに違いない。

とうとう制御出来なくなつたのか、ジェットの身体がその場に倒れた。

「こ、コイツは何なんだ?」

ノニオーライが乱れた髪を直しながら言った。先程の女の子の幽霊やジェットのスプラッターフブリにビビつていいところを見ると、ノニオーライは怖い事は苦手に違いない。

まあ俺も苦手だから、怖い事をしてスキを作るのは難しい。

「ジェット!」

全身ズブ濡れになつた秋留が近づいてきた。ジェットの悲惨な死にっぷりを見て驚いている。とりあえずジェットは放つておけば自然に首とか繋がつたり生えたりするのだが、秋留がネクロマンシーで回復させるのが一番手っ取り早い。

「次はお前か？」

目の前でノニオーライが消える。

「秋留！」

俺は叫んだが遅かつた。身体にダメージを受けていため助けることも出来なかつた。

「ノニオーライに首を蹴られて、吹っ飛びながら秋留が氣を失つた。  
「てめええええええ」

俺は怒りと共に叫んだ。

ノニオーライに向かつて短剣を繰り出す。身体中痛んだがもう氣にする氣も無い。

「じきつ」

目の前でノニオーライが消えた。消えたと同時に俺は頭にノニオーライの肘打ちを食らつた。意識が一瞬遠くなるのを秋留が傷つけられた怒りにより堪える。

そのまま拳を振り上げたが、ノニオーライを捕らえる事は出来ない。俺はそのままフラフラと甲板に倒れた。

「へつ。とうとう終いか？」

氣を失つてたまるか。

どうやら咄嗟に回避行動を取つて致命傷は避けたようだ。何とか意識は保つておける。

すぐ後にカリューが戦闘を終えてノニオーライの場所までやつて來た。

「あ～あ、俺様の仲間は全滅しちまつたのか～」

しかしカリューも無事ではすまなかつたようだ。

身体中には散弾銃で食らつたと思われる細かな傷を受けている。動くだけでも辛いに違ひない。

何とかしないと。

あいつの動きについていけるのは俺だけかもしない。このままでは俺達は全滅だ。何より秋留を足蹴にしたのは許せない。

俺はノニオーライがカリューと戦闘し始めたのを見計らって、隠し持っていた最後の傷薬を飲み干す。

僅かだが身体が動く。

だが、このままでは勝てない。

観察するんだ。盗賊としての眼を見破る洞察力でノニオーライの弱点を探すんだ。カリューと戦っている今がチャンスだ。カリューはスタミナだけは半端ではない。カリューのスタミナが尽くる前にノニオーライの弱点を……。

ない。

暫く見ていたが奴の動きには無駄がない。予測が出来ない。第三者として見てているとよく解る。ノニオーライは攻撃をする時にタメが全くないのだ。

誰でも攻撃を仕掛ける前には一度「これから攻撃をするぞ」というタメが入る。筋肉が動き出そうとする反動が現れるはず。

それがノニオーライには全く無い。

海賊として磨いた技なのだろうが、なぜ正しい事に使えなかつたのだろうか。

普通に冒険者として仕事をしていれば……いや、悪海賊の方が儲かるに違いない。俺も悪盗賊に……。

などと、クダラナイ事を考えて、ついにカリューの身体が吹っ飛んでピクリとも動かなくなつた。

ゴメン、カリュー。あんまり観察出来なかつたや。

「ああ、また海賊団、ゼロから作らないとな」

ノニオーライが呟いた。

その身体が俺をして近くにあつたベンチに腰を下ろした。

今だ！

そのお前はスキだらけだぞ！

俺は最期の力を振り絞つてネカーとネマーをぶつ放した。

木製のベンチが派手に吹っ飛び。

ノニオーライは……いない！

「てめえのケチな作戦には引っかかるんよ」

ノニオーライが俺の頭目掛けて足を振り下ろす。頭を潰す気か。

俺は転がりながら起き上がった。

「はつはつは。必死だな、ブレイブ」

俺は近くの鉄柵に手を突きながら立っている有様だ。しかしあのまま寝ている訳にはいかない。

ちくしょう！

何かないのか、あいつの弱点。

何か心を揺さぶる物でも良い。やつきの女の子の幽霊出てきてくれないかな。

「！」

ノニオーライのモーションのない蹴りが俺のコメカミをかすって鉄柵を揺らした。他力本願な事を考えている場合ではない。

と、近くに脳天に穴の開いた海賊が横たわっているのが眼に入つた。

俺の銃でつけた傷ではない。

そういうえば……。

俺は考えながらノニオーライとの距離を取る。その間、短剣や投げナイフで牽制しているが、ノニオーライには全く当たらない。

「くつ！」

突然、ノニオーライの銃が火を噴いた。俺はたまたま足元に転がっていた死体に足を取られて転んだ。すぐ頭上を弾丸が走る。

上半身裸の悪海賊らしい出で立ち。手首が切れているところを見ると俺が倒した海賊らしい。ちゃんと止血しないからそうなるんだぞ。

「何見てんだ？ そういう趣味だったのか？」

ノニオーライがフザけて言った。

完璧に舐められている。今までコケにされた分、俺をいたぶりながら殺すつもりらしい。

しかし俺は気になつて、先程の脳天直撃海賊を再び見た。脳天を打ったのはノーオーイだ。

あの時はあまり気にしなかつたが、あの海賊は何と言つたか？ 目の前の上半身裸の男のヘソが出ているのに気づいた。

「へそ……」

ぼそつと言つた一言でノーオーイの身体がびくつと動く。そうだ。

脳天を打たれた海賊は「へソ万歳」と連呼していた。どういう意味だ？ こんな時、頭脳明晰な秋留なら何かヒントをくれるはずなのだが。

俺が考えを巡らしている間にノーオーイは銃を乱射してきた。しかし先程よりは軌道が読める。

俺は身体のあちこちに傷を負いながら何とか避けた。攻撃が当たらないノーオーイは少し焦りつつあるようだ。

「へそ！」

俺はとりあえず意味も分からず叫んでみた。再びノーオーイの身体がびくつとしたかと思うと、顔が悪魔のように豹変した。

「その口、すぐに利けなくしてやる！」

ノーオーイが蹴りを繰り出す。身体を捻つて避けるとノーオーイの銃が火を噴いた。そのまま床に倒れこみ弾丸を避けた。

俺はそのままノーオーイに脚払いを仕掛ける。

「どうあつ！」

ノーオーイの怒りの蹴りが俺の脚払いを迎撃つ。鈍い音がした。どうやら負けたのは俺の脚のようだ。痛みに頭がフラフラとする。このままでは駄目だ。頭を使え。冷静になれ。

「へソ」とは何だ。ノーオーイが「へソ」を気にするのはなぜなんだ。

どうしてだ

ヘソを気にする

ノニオーライ

くだらない俳句を作っている場合ではない。痛みで頭も口クに働く  
かなくなってきた。

その時ノニオーライが投げた短剣が俺の脇腹に刺さった。

「ぐふつ」

思わず声が漏れる。しかし以前のよつなナイフのキレはない。ノニオーライがヘソを気にして集中力が出なくなつたからに違いない。ナイフの痛みのお陰で頭が少しせっカリとした。

ん?

さつき考えた俳句……「ヘソを気にするノニオーライ」。ヘソ……ノニオーライ……。何か変な響きだな。

あ!

ああ!

あああ!

俺は思わずニヤリと笑つた。その反動が脇腹に来て傷が痛んだ。  
俺は必死に笑いをこらえようとしたが、それが余計に脇腹を刺激する。

「分かつたぞ」

俺は言つた。ノニオーライの攻撃が止まる。

「何か臭わないか?」

俺はワザとらしく鼻をクンクンとさせた。ノニオーライの身体がフルプルと震え始める。

「へソか? 臭いのはへソか?」

俺は声を大きくして言った。今やノニオーライの顔が先程暴れまわつた悪靈のような顔になつていてが気にしない。

「へその臭い……ヘソ・ノニオーライ……」

「あつはつはつはつは!」

からは涙まで流している。

「今や!!! パンツ最高だつたよ~! あはは……」

秋留が「ぐ〜」の指をしながら言った。 そう。

ノニオーラのフルネームは「ヘン・ノニオーラ」。訳すと「ヘン

それじゃあ、あの海賊は撃たれても文句は言えないわな。

俺が一人絶得していると、ヘソの臭いが悪靈顔で銃を舌射してき

一発一発の弾道が手に取るように読める。

で撃つてきていない。

殺す！俺の名前を知った奴は絶対に生かしてはおかないと、海

ヘソの臭いが両手に短剣を構えて突っ込んできた。全てが見える。

俺は最期の力で、近づいてきたヘソの臭いのシャツの襟を掴んで上空に投げ飛ばした。相手の突進する力を別の方向に変えてやれば造作もない事。

特に動きの予測がつかず、田の前のヘソの臭いにたいしては。

「俺からのアレセントたるあんまり殺しはしないんだから……秋留を傷つける奴には容赦はしない！」

ヘソの臭いを上空に投げ飛ばした時に、襟の中に最期の小型爆弾を入れておいたのだ。

それに気がついたヘンの臭いは叫び声をあげようと口を大きく開き

■ ■ ■ ■ ■

俺達の頭上で大爆発が起こつた。

今までの小型爆弾の中で最高の威力だ。なかなか強敵だったぞ、  
ヘソ・ノニオーアイ。

そして今までありがとう、小型爆弾を作ってくれた道具屋のオヤ  
ジ。

こうして俺達はとうとう「ヘソ海賊団」を壊滅させたのだった。

## Hペローグ

「トンテンカン……」

「こっちに木材まわしてくれ~」

アステカ大陸への中継地點である小さな島デズリー・アイランド。その島へはあと一日と言ひ距離の海上で、俺達の乗る船は修理をされている。

あと一日の距離と言つても、巨大モンスターやら海賊やらの攻撃によりボロボロになつた船には少しキツい。

ヘソ団達を縛りあげて、生き残つた船員達を回復させるのに丸一日以上かかった。

今は秋留とイザベラの巧みな話術により、扱いやすいヘソ団の海賊達も俺達の船を修理するのを手伝つたりしている。

「本当に助かつたわ」

そう言つたイザベラの両腕には大事そうに本物のリュウが抱きかかえられている。

俺達が海賊達と激闘している間、リュウは腕を怪我したように見せかけていたクログローの白い布の中でスヤスヤと眠つていたらしい。

そういうば、チラリと見た時にイザベラとリーは戦つっていたのに、クログローは全く戦闘をしていなかつた事を思い出す。

「アステカ大陸へはまだまだ距離はあるが、海域的にはモンスターも海賊も少ないからな~」

ヒゲ船長が自慢のヒゲを撫でながら言つた。

そのヒゲをリュウが掴みたがつている。

「それにしても今回はヤバかつたな」

まだ身体のあちこちが痛い。見た目は格闘家、職業は司祭のクログローに少し回復してもらつたが、まだまだ全快にはほど遠い。クログローが優しい口調で回復魔法を唱えているせいもあって全快し

ていな氣もするが。これが秋留だつたらちよつとした回復魔法でも全快出来そうだ。

「私達もまだまだだね」

首に包帯を巻いた秋留が言った。

実は秋留はノニオーラの蹴りによりかなりのダメージを首に受けている。それを無理してヘソの臭いに大笑いしたのは、そこで観客からの笑いがあつた方がノニオーラの怒りが増大するから、という事だつた。あんまり無理をしないで欲しいものだ。

ちなみに今この場にいなカリュードジェットは風邪で療養中だ。身体の傷は魔法で癒せるが病気は魔法では治せない。

「おら！ ちゃんと荷物運べ！」

俺はネカーを構えて氣弱そうな海賊に向ける。

「は、はい！」

ヨタヨタと木箱に詰められた荷物を海賊船から俺達の船に運び入れる。

「思わぬ収穫だつたわね」

イザベラが思わずニヤリとした。

襲つてきた海賊船の中に略奪したと思われる金銀財宝が山ほどあつたのだ。俺はその財宝担当として扱いややすい海賊達を指揮している。

補給地についたら足のつかない財宝は山分けをする事になつていい。足のつくるものは治安維持局に渡すという事で俺が力説した結果だ。俺は胸が躍つた。

「とりあえず、これからのお予定を再度確認しますよ」

リーが本日何度目かの説明を始めよつとしている。

俺と秋留はいい加減聞き飽きたため、その場を離れた。扱いにくい海賊や負傷して若干頭がぼつとしている船員達が混じっているからだろう。

ちなみにあと一時間で海賊船や自分の船の修理を完了させ、明日の朝にはデズリーアイランドに到着するという無茶な予定を立てて

いる。

捕まえた海賊達も含めて一度デズリーアイランドへ行き、そこから治安維持局に海賊達の身柄を引き渡すらしい。

デズリーアイランドという島に行つた事はないが、こんなに大人數の海賊団を収容出来る程の牢屋はあるのだろうか。

「私が傷つけられるのは、そんなに怒るような事だった？」

一人きりになった甲板の端。

海風が優しく頬を撫でた時、秋留が突然聞いてきた。

「モンスターとか知能のほとんどない奴ならともかくな。人間がそんな事するなんて許せない」

俺は自分の声が少し震えているのに気づいた。

秋留の事となるといつも平静ではいられない。

暫く一人の間に沈黙が走る。

頭上のカモメの群れが鳴いていたのに気づいた。

「ありがとう」

カモメの鳴き声にかき消されてしまい小さな声で秋留が言った。俺は思わず秋留の方を振り向いた。

その顔が少し赤いのは気のせいだろうか。

「さ～って、あと少しで久しぶりの陸地だね！」

そうだ。

航海は思った以上に波乱があつたし長かった。

デズリーアイランドからアステカ大陸への航海は無事に済むといいけどなあ。

「お～い、ちょっと手伝ってくれ」

俺達に向かつて船長の低い声が向かつてきた。

俺と秋留は一緒に走り始めた。

「帆を張れ～！ 砧をあげる～！」

船長が叫ぶ。

身体のあちこちを怪我している船員達が頑張つて作業を始めた。

リーの説明した予定より三十分遅れで船の出発準備が完了した。

それもこれも頑張つてリーが全員を励ましていた結果かもしれない。多くの仲間を失い、本人達も死ぬかもしれない状況に立たされた。

今、船員達に必要なのはやる気なのだ。

船は二隻の海賊船を従えて無事に進み始めた。

デズリーアイランドの人達に誤解されないように、海賊船の真っ黒な帆は外され中央にハートの書かれた真っ白な帆が張られている。デザインしたのはイザベラだ。趣味が悪すぎる。これではかえって誤解されてしまいそうだ。

「やつと出発だな」

俺は伸びをしつつ言った。一仕事終えた後の風が気持ちいい。

「そうだね。久しぶりに少しうつくりしたいよね」

秋留も一緒に伸びをした。伸びをしている姿も可愛い。

「水着でも買つて久しぶりに泳ごうかな？」

「ぶつ」

「ぼおおおおおおおお」

俺の鼻は無常にも真っ赤な飛沫をあげた。

それと同時に二隻の船の煙突から真っ白な煙が音を出して噴出する。

赤と白で縁起が良い。

待つてろよ！

夢と欲望の楽園デズリーアイランド！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0333d/>

---

盗賊プレイブ@海賊と体力測定

2010年10月8日14時30分発行